特 231
152

讚功錄

始

特231
152

司法省保護局編纂

讃功錄

財團法人 司法保護協會

昭和六年五月廿日 法務省

序

滿洲事變を發端とする我國思想界の日本的轉換は、今次事變と共に愈ゝ全面的の展開を遂げ、一億國民は歐米の各種思想の影響から脱却し、翕然として肇國の精神に歸一するに至つた。これが爲め、我國思想國防の鐵壁は、此の長期に亘る國家總力戰の進展に拘らず微動だもせず、我國の内部的崩壞を期待せる諸外國の幻想は一沫の水泡に歸し去つたのであつて、今次事變程、我國體の尊嚴さと肇國精神の高遠さとを痛感せしめたものは無いと言つても過言ではない。

本書に收錄せる勇士達は嘗つて我國思想界の疾風怒濤時代に之に捲込まれて苦難の道を辿りたることあるも、今次事變に際會し飜然本來の日本精神に

目覺め、勇躍して征野に赴き　大君の御楯となつて赫々たる武勳を建て、護國の英靈又は榮譽ある傷兵として仰がれるに至つた人々である。其の燦然たる武勳は大東亞共榮圏確立の礎石たるのみならず、實に日本精神の曇なき顯現と言ふべきであつて、洵に敬仰感謝の念に禁へない。

茲に其の戰功を錄してこれを讃ふる所以である。

昭和十六年二月

保護局長
法學博士　森山武市郎

支那事變關係戰勳者一覽

東京保護觀察所管內

軍屬　故曾木克彥君（戰死）……（一）

陸軍步兵上等兵　故齋藤隆君（戰死）……（四）

陸軍步兵上等兵　故小川治雄君（戰病死）……（六）

水戸保護觀察所管內

陸軍輜重兵上等兵　故清水茂君（戰病死）……（八）

靜岡保護觀察所管內

陸軍砲兵曹長　故中島一雄君（戰死）……（一〇）

陸軍步兵伍長　故小林東平君（戰死）……（一五）

陸軍步兵上等兵　故增井新一君（戰死）……（一八）

長野保護觀察所管內

陸軍步兵伍長　故神村榮重君（戰死）……（二〇）
陸軍工兵上等兵　故石澤泰治君（戰死）……（二七）
陸軍步兵伍長　高地虎雄君（戰傷）……（三三）

新潟保護觀察所管內

陸軍步兵軍曹　齋藤巳代三君（戰傷）……（三四）
陸軍步兵上等兵　熊倉一夫君（戰傷）……（三九）

大阪保護觀察所管內

陸軍軍醫少尉　故小山巖君（戰死）……（四四）
陸軍砲兵曹長　故中田吉之助君（戰死）……（四八）
陸軍步兵上等兵　故谷口猛君（戰死）……（五一）
陸軍步兵上等兵　故義村英夫君（戰死）……（五三）
陸軍步兵上等兵　故長濱信市君（戰死）……（五五）
陸軍步兵軍曹　池田正雄君（戰傷）……（五七）
陸軍步兵軍曹　揚井英一君（戰傷）……（五九）

陸軍步兵伍長　大森勇吉君（戰傷）……（六一）
陸軍步兵伍長　石田重成君（戰傷）……（六四）
陸軍步兵上等兵　八田茂君（戰病）……（六七）
陸軍步兵上等兵　伊東豐饒君（戰傷）……（六九）
陸軍輜重兵一等兵　稻葉三吾君（戰病）……（七一）

京都保護觀察所管內

陸軍步兵少尉　故土淵兼松君（戰傷死）……（七三）

神戸保護觀察所管內

陸軍步兵上等兵　故中原猪之次君（戰傷死）……（七九）
陸軍輜重兵一等兵　故八木豐吉君（戰病死）……（八一）
陸軍步兵一等兵　林勝芳君（戰傷）……（八三）

高松保護觀察所管內

陸軍步兵軍曹　故國見善弘君（戰死）……（八五）
陸軍衛生兵上等兵　故西原西平君（戰病死）……（八八）

陸軍歩兵上等兵　三木常緑君（戰傷）……（九〇）
陸軍歩兵上等兵　古田豐一君（戰傷）……（九三）、

名古屋保護觀察所管內

陸軍歩兵伍長　故花井利文君（戰死）……（九五）
陸軍輜重兵上等兵　故鈴木泰悟君（戰死）……（九九）

金澤保護觀察所管內

陸軍歩兵軍曹　故佐々川定次郎君（戰死）……（一〇三）
陸軍歩兵上等兵　故伊藤重男君（戰死）……（一〇四）
陸軍歩兵上等兵　故蓑輪郁彥君（戰死）……（一〇六）
陸軍歩兵伍長　故青木文次君（戰傷死）……（一〇八）
陸軍歩兵軍曹　島田幸太郎君（戰傷）……（一一三）

廣島保護觀察所管內

陸軍歩兵上等兵　故大野新兵衛君（戰死）……（一一四）
陸軍歩兵上等兵　故伊藤專一君（戰病死）……（一一九）

陸軍歩兵上等兵　故平田耕一君（戰病死）……（一二一）
陸軍歩兵上等兵　古田稔君（戰傷）……（一二三）

岡山保護觀察所管內

陸軍歩兵伍長　故後藤賢君（戰死）……（一二六）

福岡保護觀察所管內

陸軍歩兵上等兵　衞藤速君（戰傷）……（一二九）
陸軍航空兵上等兵　堀田勇君（戰傷）……（一三四）

熊本保護觀察所管內

陸軍歩兵大尉　故村岡徹君（戰死）……（一三六）

青森保護觀察所管內

陸軍歩兵中尉　故青木實君（戰死）……（一三九）

軍屬　故　曾木克彦君

明治三十八年三月二十二日生

本籍　東京市澁谷區榮通一ノ三八

略歴

一、大正十五年三月　第二高等學校文科卒業
一、昭和四年三月　東京帝國大學經濟學部卒業
一、昭和四年六月　日本勸業證券株式會社勤務
一、昭和十年十月　滿洲國民政部警務司司法科勤務
一、昭和十一年六月　天津〇〇公館〇〇機關勤務
一、昭和十二年五月　黄公館〇〇政府〇〇機關係
一、昭和十二年八月　北京〇〇分隊〇〇機關勤務

戰　歷

昭和十二年七月支那事變勃發するや〇〇參謀の下に靖鄉隊組織され、舊〇〇軍の軍人を以て編成し、專ら敵軍の動靜を探り、日本軍を側面より援助したが、曾木君は軍屬として靖鄉隊長に任ぜられ〇〇參謀の下に於て靖鄉隊の連絡、情報の蒐集、報告並謀略に參畫して來た。

九月十二日保定會戰に參加するや靖鄉隊は裝甲列車を以て保定を攻擊、二十四日午前五時十五分保定城に一番乘りをした。引き續き平漢線を南下し、十月七日より石家莊會戰の序幕たる正定攻擊に移り、情報蒐集、橋梁架設、道路修理等に奔走し、遂に十月十一日午前四時過ぎ石家莊に入城、翌十二日憩ふ間もなく追擊に移り、十五日高辰軍司令部たりし順德を占領、十七日邯鄲を攻略し、夕刻該地出發馬頭鎭北方鐵橋南岸の敵を夜襲し、逃るゝを急追し磁州驛に入り次で敵中深く突入した。

この附近の敵はその數甚だ多く苦戰の結果、同夜河南省境漳河の鐵橋に達し激戰を交へた。即ち〇〇部隊長の下に在つて彈雨の中に身を挺して靖鄉隊員を指揮し、附近に散亂せる敵の重要書類を蒐集調査中對岸三百米の敵陣地から猛擊せられ、一彈は右脇腹から左に貫通して左腕を創けた爲め同君は其の場に倒れた。直に裝甲列車內に收容され軍醫丸山博士の手厚き治療を受けたが、腸破れて重態に陷つた。

この時〇〇部隊長が「シッカリセヨ」と叫ぶや、「天皇陛下萬歲」と唱へた。車內の將兵一同も相集まつて「天皇陛下萬歲」を三唱した。最後にまた小さき聲で「萬歲」と唱へ十八日午後十一時過ぎ永眠した。

昭和十三年八月、戰功により勳六等に敍せられ、旭日章を賜つた。

陸軍歩兵上等兵　故　齋藤　隆君

明治四十四年九月一日生

本籍　大阪市天王寺區大道町一ノ一三六

略歴

一、昭和四年三月　大阪府立天王寺中學校卒業

一、昭和四年四月　第六高等學校文科甲類ニ入學シ、昭和七年十月同校ヲ中退ス

一、昭和九年七月　上京シテ保險外交、雜誌編輯等ノ職業ニ從事ス

一、昭和十四年八月　應召

戰歴

應召後數ヶ月にして中支那方面派遣〇〇部隊に屬して出征し、各地に於て警備任務に就いた。其の間數次の戰鬪に參加して奮戰したが、昭和十五年六月二十日頃、江南省南昌縣東村附近にて數十倍の敵と對戰、同部隊は惡路に加へて遮蔽物少き地形にも拘らず頑强に對戰する敵を猛攻進擊し、同月二十二日朝敵前五十米附近に肉迫したる時、君は不幸敵の一彈のため頭部に貫通銃創を受け、其の場に壯烈なる戰死を遂げたのであつた。（勳功は未發表なり）

陸軍歩兵上等兵　故

小川治雄君

明治三十八年十二月二日生

本籍　千葉縣山武郡千代田村大字山田二六五

略歴

一、昭和二年三月　水戸高等學校卒業

一、昭和二年四月　東京帝國大學經濟學部ニ入學シ、同大學ヲ中退後、ハ雜貨商ニ從事ス

一、昭和十三年四月　應召

戰歴

昭和十三年四月二十日〇〇聯隊に入隊し、同年九月八日中支方面に出征各地に轉戰したが昭和十三年十月十八日支那江西省永修縣甘木關附近で不幸にも細菌性赤痢に罹り、〇〇野戰病院に入院したが、その後〇〇野戰病院に移り加療中、同院で病歿した。

陸軍輜重兵上等兵　故

清水茂君

明治四十三年六月十一日生

本籍　茨城縣新治郡美並村大字上大堤二五ノ一

略歴

一、大正十二年三月　新治郡美並村尋常小學校卒業

一、大正十四年三月　新治郡美並村尋常高等小學校卒業ト同時ニ農業ニ從事ス

一、昭和十二年八月　應召

戰歴

昭和十二年八月二十二日應召、〇〇聯隊に入隊、間もなく出征し、北支戰線に於て豐臺、永定河、拒馬河、大冊河、保定、石家莊、順德、磁縣等の各戰闘に參加中、偶ゝ病を得(赤痢)、同年十一月二十五日〇〇野戰病院に入院加療中、遂に同年十二月五日同野戰病院で戰病死した。

昭和十三年八月一日、戰功により勳八等瑞寶章を賜はり一時賜金壹千圓を拜受した。

陸軍砲兵曹長　故　中島一雄君

明治四十一年十一月二十四日生

本籍　靜岡縣濱名郡北庄内村

略歴

一、大正十三年三月　白洲尋常高等小學校卒業
一、大正十三年四月　東京鐵道局教習所普通部木工科入所
一、昭和二年三月　右卒業
一、昭和二年四月　東京鐵道局工務課勤務
一、昭和三年十二月　幹部候補生トシテ〇〇聯隊ニ入隊、翌年十一月除隊ス
一、昭和六年四月　中央大學第二豫科入學
一、昭和七年十二月　右退學
一、昭和八年九月　水戸保線局勤務
一、昭和十二年九月　應召

戰歴

昭和十二年九月十六日〇〇聯隊に入隊、上海派遣〇〇部隊に屬し出征したが、翌十三年三月十八日壯烈なる戰死を遂げた。その詳細は所屬部隊から遺族に寄せられた手紙に明らかである。

昭和十三年三月十八日、戰功に依り勳七等功六級に敍せられ金鵄勳章並に青色桐葉章を授與された。

部隊長の手紙（尊父宛）

拜啓　御書面拜見仕り候

小生も生還御拜顏迄は申上げざる積りにて只公報にて簡單に御通知申上げたるのみなれ共御書面拜見致し御遺族の御心情を御推察委細申上ぐる次第に候

御令息一雄殿名譽の戰死に就ては既に御承知の通り過ぐる二月上旬當隊は編成上一雄殿を指揮官とする約三十名を鳳陽城に殘置し主力は〇〇に至り四月十日迄連日連夜彼我の銃砲彈相打つ苦鬪致居候然るに三月上旬、本隊との連絡及調査書類提出の必要上一雄殿を〇〇に招致する

ことに相成り候も小生なんとなく心進まず思ひ出しては止め、思ひ出しては止めると言ふ風にて十日間位を經過致し候其の中に他中隊にて酒保品、郵便物等運搬のため車輛四つばかり鳳陽城へ行く序で有之候爲、其の車輛が歸る時一緒に〇〇へ來る樣に命令致し候右車輛は三月十七日鳳陽城を出發し同日は途中一泊し翌日出發して或る地點に到りたる所、突然左の山腹より下りたる敵と前面に待機せる敵（約四百、機關銃四挺、その他小銃多數携行）のため、射擊を受け直ちに應戰せるも味方は三十餘名しかも小銃十五挺位しか携行せず約二十分にして友軍戰車應援に來る迄に我方六名の戰死、戰傷者若干、軍馬十三頭戰死致し候當時幹部は他中隊の少尉一名、准尉一名と一雄殿の三名にて最後迄死守せるため遂に戰死（一雄殿）戰傷（少尉准尉）を出し幹部全滅と相成り候指揮官は〇〇少尉にてこの方は兩方の胸に小銃彈二發貫通せるも一方の肺が免れたため奇蹟的に一命を取り止め申候

一雄殿は只一發貫通せるのみなれど心臟へ貫通せるため即死と相成候

遺骨は茶毘に付し中隊事務室へ安置、朝夕回向致し、過日當地にて慰靈祭執行の上御還送の手續取り申候

小生出征以來、陰に陽に公務に私交に兄弟同樣に交際致し候公務は飽迄熱心誠實に、小生の如き乏しきを者を助け、部下の信望を一身に集めしのみならず、他中隊の者一人として敬慕せざるなき人格者にて今回の訃報を傳へられたる時、小生は身を切らるるよりも苦しく、兩腕をもがれたる心持ち致し候素より一死報國を誓ひ出征せる御本人としては御本望とは存候へ共一度御尊父樣御令閨樣外皆樣の心情を御推察申上ぐる時只涙あるのみに候

小生も一雄殿に對し最後に「一言話しをして見たかつた」「自分の手でしつかり手を握つて最後を見屆けたかつた」「一雄君も定めし自分に話したかつた事があつたに違ひない」「自分が一緒に居たならこんな悲慘な事は起さなかつたらう」等今日でもよく考へる事有之候而し今は何遍繰りかへしても詮ない事、吳々も御回向願度、小生も幸に生還せば必ず墓參に參上、一雄殿御存命中の功績其の他種々御報告可申上候

一雄殿が江陰城攻擊に於る働き等は實に勇壯にして、小生は「殊勳甲」に該當するものと存じ候

遺留品少きため御懸念も有之候事と存じ候へ共此は小生內地へ還る迄申上げまじく、萬一小生戰死せる場合は永久不問に附し置かれ度く願上候

御令閨樣には一入御力落しと存じ候へ共何分御子息御成人迄は御大切な御身吳々も御配慮願

上候

尚ほ申上げる事山々有之候へ共何れ後便にて申上げる事と致し吳々も御一同様の御自愛と一雄殿の御冥福を祈上候

先は御返事迄如斯御座候

敬具

○○部隊○○隊長

村上貞三

中島宇多治様

陸軍歩兵伍長 故 小林東平君

大正二年三月二十五日生

本籍 靜岡縣清水市江尻六一七

略歴

一、昭和二年三月 清水市尋常高等小學校高等科第一學年修了

一、昭和四年九月 清水市港町豐年製油會社勤務

一、昭和九年九月 清水市外袖師村昭和製炭會社勤務

一、昭和十二年九月 清水產業株式會社勤務

一、昭和十三年八月 應召

戰　歷

昭和十三年八月應召、同年十二月末出征、中支に於て活躍中、昭和十四年十二月廿四日壯烈なる戰死を遂げ、その功に依り勳八等に敍せられ功七級を賜る。その狀況は同君所屬部隊長から遺族に宛てられた次の手紙によつて明らかである。

部隊長の手紙（尊父宛）

拜啓突然乍ら悲しき御報告を致さねばならぬ事を甚だ殘念に存じ候御令息小林東平伍長には去る十二月二十四日河南省遊河附近の戰鬪にて名譽の戰死を致し候我々〇隊將兵一同衷心より哀悼の意を表すと共に英靈の冥福を祈り候

東平君には去年初め中支の地に出征せられてより襄東の大會戰を初めとして大小幾多の討伐に參加當に勇敢に活躍致し其の功績は赫々として不滅の光を放ち居り候

戰死當時の模樣は次の如くに候

十二月二十四日朝九時喜廟北方に進出せる敵を隨所に殲滅して攻擊を續行しある時敵は多數の增援隊を得て側方より我に抗し來りたるも小林伍長は附近の者と之に猛射を浴びせ難なく敵

を擊退致し候この勇敢にして沈着なる行動は中隊に何等の不安も與へず攻擊を續行致す事を得せしめ申候も小林伍長には不幸にも其の時敵の一彈頭部に命中、萬歲を叫びて戰線の華と散り申候時正に二時二十分小林伍長の行動は全く勇敢にして實に武人の鑑と存じ候

御遺族の皆樣の御落膽の程拜察致し候も莞爾として斃れし東平君の英靈は永遠に東亞建設の礎となつて此の大陸の地に安らかに眠り居り候間御安心被下度候

我が隊長〇〇〇〇少佐殿にも本戰鬪に於て名譽の戰死をとげられ候先は右不取敢亂筆にて御報告迄

不一

十二月二十五日

〇〇部隊〇〇隊歩兵中尉
谷　津　敏　夫

小　林　政　吉　殿

陸軍歩兵上等兵　故

増井新一君

大正四年一月六日生

本籍　靜岡市東草深町三ノ二一

略歴

一、昭和五年　靜岡縣立靜岡商業學校三年退學

一、昭和六年　名古屋鐵道局靜岡機關庫勤務

一、昭和十二年十月　應召

戰歴

昭和十二年十月五日勇躍征途に就き、〇〇上陸以來赫々たる武勳を樹てつつ奮戰中のところ、遂に同年十月十八日午前蘇洲河の激戰に於て名譽の戰死を遂げた。

昭和十二年十月十八日、戰功により功七級に敍せられ金鵄勳章を授與された。

陸軍歩兵伍長　故　神村榮重君

明治四十二年三月二十八日生

本籍　長野縣西筑摩郡福島町五〇〇六

略歴

一、昭和三年三月　長野師範學校卒業
一、同　年四月　長野縣西筑摩郡上田小學校訓導拜命
一、昭和六年三月　長野縣諏訪郡湖南小學校奉職
一、昭和十年一月　現役兵トシテ〇〇聯隊ニ入營
一、同　年十二月　歩兵上等兵ニ進級
一、昭和十一年二月　右隊除隊
一、昭和十二年一月　長野縣西筑摩郡福島小學校代用教員勤務
一、昭和十二年八月　應召

戰歴

昭和十二年八月十八日召に應じ入營、早くも同月二十九日〇〇部隊に編入され、勇躍して北支に發ち〇〇に上陸、進んで九月二十一日保定を前にして大冊河の會戰に參加した。

君は實に勇敢に陣頭に立つて驀進し第一陣地に於ては敵の輕機關銃座に手榴彈を浴びせかけこれを撲滅し〇隊の前進を容易ならしめてこの戰闘の勝因を作り、更に第二陣地に突入しようとした時、亂投された敵手榴彈は君の顏面及左側腹部に命中した。直ちに手厚き看護を受けたが遂に空しく　天皇陛下萬歳を二度唱へつゝ壯烈な戰死を遂げた。

戰功により勳八等功七級に敍せられた。

戰友の手紙（母堂宛）

拜啓　過日は御書面に預り恐れ入ります。當方より書面致す可き處寧日なき戰闘行動についで御無沙汰に打過ぎてしまいました。何んとも御詫び申上げやうも御座いません。昨年八月應召の節神村君とは緣あつて同じ〇隊しかも同じ〇隊に編入され教養ある戰友を得てこの上もない喜びに極めて元氣で勇ましく晴れの征途に上りました。

神村君は入隊以來一回も病氣せず常に何事も率先して事に當り第一線に奮闘を續けて居りました。

想出深い昨年の九月二十二日あの世界戰史を飾る保定攻略戰大冊河黄村附近の大激戰に遂に護國の神と化してしまいました。當時隊長殿より細部に亘る御通知のあつたことと思ひます。今はなき戰友の面影を描きつゝ御母上様の胸中をしのんでおくればせながら當時の模様を御知らせ致します。

昨年九月十三日北支豐臺より敵を進擊以來急追に續く急追でほとんど不眠不休泥濘のぬかるみを又炎天下を泥水で咽喉をうるほし、粟、芋でその日の露命をつなぐ等、實に想像にあまりある惡戰苦闘を續けて進軍致しました。九月二十一日午後大冊河約一里手前に戰闘準備をとゝのへて時の熟すを待ちました。携帶糧秣はなく小麥粉をだんごに丸めて鹽を菜とし、分隊員一同丸座をつくつて夕食を濟ませ、朝食の準備としてその食べ餘りを飯盒につめて煙草をふかしながら皆で「元氣にしつかりやらう」と誓ひ合ひました。

赤い夕陽の反映を浴びつゝにつこり笑つた笑顔が、神村君の最後の笑顔だつたのです。午前十時半頃戰闘行動開始、十一時半頃はすでに大冊河の岸に出て對岸の敵と猛烈なうち合ひを始めました。十二時渡河命令下り、河中約二百米、首迄浸水、軍裝のまゝ戰闘を續けつゝ渡河を敢行、ずぶ濡れのまゝ河原の砂の中で大激戰を展開しました。

わが〇隊は〇隊の中央第一線となり專ら堅固な敵陣地正面に向つて攻擊開始、敵彈雨飛の中を前進、神村君は〇隊の中央陣頭に立ちてよく果敢に奮戰致しました。敵の第一陣地を勇敢に突破占領息つく間もなく前進し、渡河地點より約五百米、敵の第二陣地三十米前に於て猛烈に敵の反擊を受け正に突擊にうつらんとした直前亂投する敵の手榴彈が神村君の顏面及び左側腹部に命中し、あつと云ふ間に鮮血に染まつて倒れてしまいました。直に裝具を外して手當せるもあまりにも傷の範圍が廣く如何とも致し様御座いませんでした。

うめく神村君を抱き起して「しつかりしろ」とはげましながら「何か云ふことはないか」と問へども只呻くのみにて次第々々に衰へる苦しい吐息の中からかすかに　天皇陛下萬歳を唱へ二回目は　天皇陛下のみにて後は云へず九月二十二日午前二時頃壯烈なる戰死を遂げられました。折から雲間もるゝ月光が蒼白く血の飛沫に染つた戰場を照らして一層悽慘を極めました。

「神村君仇はとるぞ！　安心して瞑目せよ」と生ける人に言ふが如くに大聲で呼んでそのまゝ前進、午前八時頃さしもの堅壁を完全に占領、溢るる涙で日章旗を高く揭揚、戰死戰傷者の收

容も出來ました。

勇士神村君の英靈に戰場の亂れ咲く名も無き花を手向て涙で冥福を祈つてやりました。今年の正月元旦皇居遙拜後○隊員一同にて一杯の屠蘇を亡き戰友に捧げやうと乾杯後門松にかけて只管懇ろに瞑福を祈りました。親兄弟はどんな思ひで新年を御迎へしたらうかと察するに餘りあるものがありました。愈々北支の戰線にも春訪れて木々の若芽が一齊に萠え出し青い麥の上を綠の風が吹いて居ります。內地では何々部隊凱旋だのと新聞紙上を見られるにつけ御母上樣には斷腸の思ひで居られることと遠察致します。

では最後に神村君の冥福を心から祈つて亂筆をとめます。

敬具

昭和十三年四月十日

田中五郎

○隊長　村田義實

神村しげる樣

○隊長の手紙（母堂宛）

謹啓　時下向寒の砌御一統樣如何に候や御伺ひ申上候

陳者小生今次事變に○○隊第○○隊長として貴家神村伍長と共に出征致せし者に御座候然るに去る九月二十一日より二十二日に亘る大冊河河畔黃村附近の戰鬪に於て神村君は名譽の戰死を遂げられ候事は皇國の御爲とは云ひながら御一家の御悲歎は如何ばかりかと遠察仕り候不肖○隊長として部下を失ひし心情實に感慨無量に御座候

謹んで御悔み申上候早速御悔み申上ぐ可き所に御座候處當隊の○長○○大尉殿戰死され、尙爾後追擊に追擊を以てし今日に至る迄其の機會を得ざる有樣にて漸く一兩日の休養を與へられ御悔申上ぐべき狀態に御座候へば延引の段御海容被下度候

左に伍長戰死の狀況の概略を申上げ神村君の靈前に捧げ度候御承知の事かと存じ候へ共黃村は保定陣地の一部にして最も堅固を誇るものに御座候此の堅固なる陣地を一擧に突破せる當隊の功績は實に偉大なるものにして軍司令部よりも讃辭を賜り居り隨つて本戰鬪に於ける犧牲者は他の何れのそれよりも其の名譽たるや最高のものに御座候神村君は實に勇敢に働き常に○隊

の第一線に在りて前進し、敵前百米の地點に於ては敵の輕機關銃に手榴彈を投擲して撲滅せしめ、〇隊の前進を容易ならしめたる等、君の肉彈は本戰鬪戰勝の因を造りたるものと固く信ずるものに御座候然るに不幸にも敵前五十米の地點に於て顏面及左側腹に敵彈を受け遂に護國の鬼となられ候君の唱へたる　天皇陛下萬歳の聲は未だに我々の腦裡に刻み込まれ復仇心をいやが上にもあふり居り候以上は概略に候へ共御報告申上併せて御悔み申上度如斯に御座候

敬具

吉岡少尉

神村しげる様

陸軍工兵上等兵　故　石澤泰治君

明治四十二年三月六日生

本籍　長野縣上伊那郡赤穗町大字赤穗六五三

略歴

一、昭和三年三月　長野師範學校卒業
一、昭和三年四月　長野縣上伊那郡生東小學校訓導拜命
一、昭和五年四月　同　縣諏訪郡永明小學校ニ轉勤
一、昭和八年四月　東京市日本小學館夜學校勤務
一、昭和十二年一月　現兵役トシテ〇〇聯隊ニ入營、同年八月〇〇部隊ニ編入セラレ出征ス

戰　歴

昭和十二年一月現役兵として〇〇聯隊に入營、支那事變の勃發により同年八月〇〇部隊に編入せられ、勇躍北支方面の征途に就いた。

北支琉璃河の渡河戰、楊家屯、黄村、彰德附近の戰鬪を經て十一月十一日大名城總攻擊に當り城壁爆破の決死隊に加はり、敵前四、五百米迄肉迫中、敵迫擊砲彈のため壯烈なる戰死を遂げた。

戰功により勳八等功七級に敍せられた。

戰友の手紙（令兄宛）

久しく御無沙汰いたし申譯も御座いません。小生も益々元氣戰務に從事いたして居りますから御安心下さい。だが戰友を亡くしたのが殘念です。今石澤君の最後を書いて見よう。十一月六日午前六時大名と云ふ町を攻擊の目的で彰德街を出發しました。五日間行軍して大名西方五十キロの小部落に着き攻擊準備を完成し、愈々十一日午後三時總攻擊と定り、吾が工兵隊は城壁爆破を命ぜられ〇〇〇隊（石澤君の〇隊）がそれに當り、吾が〇〇〇隊は其の豫備となり後方を前進しました。……〇〇〇隊は死傷者が多いため人員不足で作業がはかどらず、やつと午

後七時半一大音響と共に大城壁を吹飛ばしました。それッと云ふので〇〇〇隊は勇躍前進し敵の射擊を物ともせず人梯子となつて若干の歩兵を登らせ邊りの敵を追散らし、十字鍬や圓匙でレンガをくづし、登り易くして歩兵の大半を登らせて、各門を開き、城壁上にて萬歳を唱へたのが八時半であつた。翌十二日には石澤君等名譽の戰死者の火葬を行ひ骨を拾ひました。〇隊長の心遣りで城壁には戰死者二名の碑が立てられました。大名縣のある限り永久に殘ることでせう。……

昭和十二年十一月十七日

石澤好人様　　大高七郎

部隊長の手紙（尊父宛）

晩秋の候益々御健勝の御事と奉存候

扨て既に公報にて御承知の如く貴息泰治君は去る大名縣の攻擊に於て名譽の戰死を遂げ申候

當時〇隊は縣城を攻擊すべき〇〇聯隊に配屬せられ、〇〇小隊に對しては〇〇〇隊に協力して

西門を爆破すべく下命候よつて泰治君等は破壊班として〇隊長〇〇准尉と共に勇躍前進中敵砲彈の集中火に遭ひ、其の彈の爲め四名一時に跳ねとばされ、貴息は遂に壯烈なる戰死を遂げ申候入營以來屢々泰治君と會談し、よくその優秀なる資質と性格とを知る小生として、また本事變勃發して出動に際しては特に立派なる武功を立てゝ將來の活躍を期待したる小生として、今こゝに泰治君を失ふは誠に痛心に堪へざる次第に候

然れども泰治君の死に憤激せる〇隊長は殘兵を提げて驀進し遂に城壁を爆破して歩兵を突入しめ、大名城に日章旗を揭げ見事に復讐を遂げ申候此れ實に泰治君等の英靈の賜物とも申し得べく候

今泰治君の壯烈なる死を語る血染の軍服有之候恐らく御父君としては此れ等を見るは傷心に堪へざることゝ存じ候はん又從來は大抵戰死者と共に燒きたるも泰治君の從來の經歷に鑑み特に保存致したるものに付不日御送附致し度候間、御入手の上は御手許に保存下さるなり、或は鄕里の學校へ記念品として保存せらるれば、眞に血を献げて護國の神となつた本人の英靈も喜ばるゝかと存じ候

昭和十二年十一月十六日

敬具

石澤松治郎殿

〇〇〇部隊氣附　〇〇部隊
〇〇隊長　松田喜久馬

部隊長の手紙（尊父宛）

前略　扨て今般香月司令官より當隊琉璃河の渡河戰鬪に對し榮譽ある感狀を附與せられ候此の光榮は實に泰治君等の勇戰奮鬪の致す所と感謝の念に堪へず地下の英靈も此れを聞かば必らずや滿足せらるゝことと存居候（後略）

昭和十二年十二月二十八日

敬白

石澤松治郎殿

〇〇隊長　松田喜久馬

陸軍歩兵伍長　**高地虎雄君**

明治四十四年五月九日生

本籍　長野縣埴科郡倉科村八〇八

住居　中華民國〇〇省〇〇陸軍〇〇機關

略歴

一、昭和六年三月　長野師範學校第二部卒業

一、昭和六年九月　長野縣更級郡鹽崎尋常高等小學校訓導

一、昭和十二年一月　應召

一、昭和十五年一月　現地除隊

一、同　年　同　月　中華民國〇〇省〇〇陸軍〇〇機關勤務

戰歴

昭和十二年一月十日〇〇聯隊に入營、同年八月〇〇部隊に屬し出征した。

河北省大冊河渡河戰を經て各所の激戰に參加し、昭和十三年二月十一日十七里店の南方高地占領の際は擲彈筒班として猛烈に抵抗する敵を擊破しつゝ第四のトーチカに突入の際、敵の投擲した數個の手榴彈のため、右顏面四ヶ所と右手背部一ヶ所、頸部一ヶ所に輕傷を負ひ現地豫備病院に入院したが間もなく再び一線に立つことが出來た。

次いで澤州への進擊途中に於ても頸部、額部に輕傷を負つたが、入院するに至らず進擊を續け更に同年六月開封攻略戰に重傷を負ふに至つた。開封東北角の城壁前十五米の鐵條網破壞口を潛り突入した瞬間、敵電氣地雷の爆破に依り下顎部、左手、其の他口腔內部、耳、眼等に負傷し瀕死の重傷であつたが、幸ひ約二ヶ月の入院で又再び勇んで第一線に立つことが出來た。其の後も幾度か激戰に參加して勳功を現はした。

昭和十五年一月河南省〇〇に於て陸軍歩兵伍長に昇進して現地除隊になり、目下〇〇機關の重要任務に就き、興亞建設事業に精勵中である。

陸軍歩兵軍曹

齋藤巳代三君

明治三十八年四月十一日生

本籍　秋田縣南秋田郡馬場目村二一

住所　新潟縣高田市東本町二丁目四四ノ三

略歴

本籍地ニ於テ小學校卒業後神奈川縣其他ニ紡績會社職工トシテ出稼、〇〇聯隊ニ現役兵トシテ入營、除隊後高田運輸株式會社員トシテ入社、昭和十三年八月二十七日應召シ、九月四日出征ス、昭和十四年十一月二十五日除隊トナレルガ、除隊前軍曹ニ昇進ス。

戰歴

昭和十二年八月二十四日召集令狀に接し、同月二十九日勇躍歩兵上等兵として〇〇聯隊に入隊、九月四日〇〇出帆、〇〇國々境を通過、北支河北省豐臺着〇〇〇〇兵團に屬し、直ちに戰鬪に參加、爾來二年有餘、戰鬪參加八十餘回、河北、河南、山東の一部及山西の四省に亘り千數百里を長驅し、不死身勇士と稱せられたが、不幸昭和十四年八月十一日山西省趙城縣磊上村の掃蕩戰に僅か七十餘名を以て敵第八路軍決死隊一個聯隊、第六十二師保安隊一個聯隊の約二千名に遭遇し頑强に抵抗する敵と對戰六時間、遂に名譽の戰傷を負ひ、野戰病院に後送せられたが、九月二十日退院と共に部隊追及、十月三日から再び黃河左岸掃蕩戰に參加し、十一月十一日交代歸還と共に同月二十五日召集解除せられた。

赫々の武勳により昭和十四年二月伍長に、同年八月軍曹に進級した。

歸還後は高田市〇〇〇〇株式會社に勤務、銃後報國に專念してゐる。

手記

昭和十四年八月九日午後四時〇隊員集合の傳令が〇隊本部から來た。

「命令！ 午後八時出發の豫定。食糧は甲一日、乙一日、彈藥は小銃彈一八〇發の外手榴彈二發持參の事。各〇隊の編成は病氣の外は全員。患者を以て警備地區の守備とす。終り。」

午後八時〇隊本部から出發命令は下つた。〇隊長は馬上から「日常の注意をよく守り十分なる働きをせよ。第〇〇隊は尖兵とす。〇〇村に前進す可し。爾後の行動に就ては別命す。直ちに出發」其の時〇隊長は「齋藤軍曹は路上斥候となり〇隊の前方〇〇米を前進し、中間〇〇米に連絡兵二名を出せ。」

夜行軍は開始された。翌朝六時漸く敵地に近づく。

內地ならとつくに夜が明けて居るのだ、山西の夜は未だあけやらない。戰鬪準備は完了してゐる。何時でも攻擊は開始し得る。尙も前進を續けた。

突然前方に「誰か〳〵」と叫ぶ聲を聞く。敵步哨線にひつかゝつたのだ。

手榴彈を投げつける。炸裂と同時に一擧に突込みなんなく第一線は突破した。それより直ちに自分は〇隊と共に前面の敵情、地形並に重火器の位置を偵察に出かけた。

見れば敵は既に配備につきつゝあり、この期を失するなら友軍不利と直感した。この時〇隊長は部下を引連れ急行して來られた。早速敵情を報告、即刻攻擊を開始することに決した。隊長は

軍刀を振つて率先敵第二線に突擊した。曉にこだまする喊聲！銃劍のきらめき。夢中になつて突進。

漸く第二線を突破して更に攻擊に移らんとした時、嗚呼側面より敵チエッコ機關銃火は遂に〇隊長をドッと倒した。笑を殘して隊長遂に立たれず。

急いで隊長を〇隊長の許に運ばせ、代つて自分が指揮に當る。反擊して來る敵をものともせず尙も攻擊を續ける、戰友も多く倒れ或は傷つく。

併し自分には絕對に自信があつた。友軍に損害大なる時は必ず敵は數倍以上に傷んでゐることをよく知つてゐた。

最後の一兵迄と攻擊又攻擊！

突如敵チエッコ機銃の一彈は自分の右大腿部をかすめた。「なにくそ、かすり傷だ」と尙も頑張る。〇隊員も既に二名負傷した。何んで自分が退かれやう。

この時敵は本隊からの增員があつたらしく、異音のラッパを吹立て打ち寄せる波の如く何回となく押寄せては手榴彈の雨を降らす。死鬪五時間！

〇〇隊本部と連絡はなつた。十一時過ぎ敵陣に砲彈が炸裂し始めた。敵は尙も反擊を繰返へす。

併し我が砲彈にはさすがの敵も次第に動搖を示して來た。そして遂に逃走し始めた。

この時とばかりに〇隊長を陣頭に「ワアッ」と敵中に亂入した。自分も遲れじと立ち上つたが足の傷は如何せん。

本隊は既に敵の背後を迂回、退路を遮斷し敵を殲滅すべく追擊を開始した。戰は終つた。自分の負傷は大した事はない、再び戰線に立つ事を戰死の隊長に誓つた。

陸軍歩兵上等兵　**熊倉一夫君**

明治四十四年七月三十一日生

本籍　新潟縣三條市大町九六七

住所　新潟市水道町

略歴

一、昭和四年四月　新潟高等學校文科甲類入學

一、昭和六年七月　同校退學

一、昭和十三年三月　應召

一、昭和十四年三月　戰傷ノ爲メ除隊

戰　歷

昭和十三年二月十八日名譽の召集令狀に接し翌月一日勇躍入隊、間も無く北支派遣軍に所屬し、大陸の戰野を馳驅し、よく日本人としての眞面目を發揮し、力戰奮鬪遂に漢口攻略麒麟山の激戰で兩腕に敵彈を受け、後送さるゝの餘儀無きに至り、無念の涙の裡に母國に歸還した。爾來靜養治療に努め再起奉公を念願して居たが、昭和十四年三月三十一日陸軍上等兵に進級の上除役となり、目下〇〇新聞〇〇支局記者として活躍しつゝある。

手　記

麒麟山は彌彥山位の高さで左右に同じ位の山が二つ並んでゐる。その手前の百五十米位の小山を四つ、敵を擊退しながら忽ちにして越えた。昭和十三年九月二十五日午後四時半頃、麒麟山の麓に着き一息する間もなく倒つたやうな岩角をよじ登つて、同日午後七時十五分遂に山頂を占領日章旗を振つて天にも屆けと萬歲を唱へた。

併し占領したのは僅か一の小部隊だ。敵の逆襲に備へて陣地を構築、警戒してゐると果して午後十一時半頃第一回の逆襲があつた。四尺位の草原に伏しかくれつゝ敵大部隊が三十米附近まで

接近して來る。チエッコ機銃がうなる。暗に點滅する敵銃火は草を薙ぎ岩角を削ぐ。と見る間にワッと殺到、手榴彈の雨を降らせて來た。

併し迎へるは强剛揃の〇〇健兒だ。應戰また應戰約三十分にしてこれを擊退した。と思ふ間に十二時過ぎ第二回の逆襲があつた。これも難なく擊退したが、この頃から彈藥が缺乏し出した。第三回目は午前一時頃だつた。彈藥を節約するため我々は敢然突擊に移つた。「頑張れ！」と勵まし合ひながら松林を出てワァーッと突つ込む。敵はそれを見るとクルリと後を向いて逃げ出す。それを飛び込んでは突き刺す。併し敵は共產系の青年隊だけあつて容易にひるまない。逆襲また逆襲一時間にわたつて死鬪が續いた。午前二時敵は一時後退したのでホッと疲れを休めてゐると午前四時から更に四回の猛逆襲を加へて來た。この時の敵は約六百、味方に數倍する。味方の彈丸は餘すところ僅か二百發餘、一發必中でも四百の敵は殘るのだ。恐らく大多數の戰友は既に死を覺悟したらう。併し私は自分の胸中に「俺は斷じて死なゝい」と云ふ妙な自信がハッキリと刻みつけられてゐたことを思ひ出す。私は自分は必ず勝つと信じてゐた。そしてこの信念は一身の死を覺悟してゐた戰友達の胸底にも亦共通したものであつたらう。

敵の逆襲はその前までは三十米位まで來ても迎擊されると百米位下つたが、今度は味方の彈藥

の不足を見くびつて退らなかつた。暗をはつてヒシヒシと迫る敵の威壓力は無氣味なものでさへあつた。突擊合圖のチヤルメララッパのひびきは恐らく終生私の耳について離れないだらう。それは何とも形容の出來ない陰氣なひびきだ。

拂曉を迎へんとして息をもつけぬ銃劍突擊實に十回、○隊長の軍刀は折れ、名譽の戰死、戰傷者は續いた。

午前六時頃敵の第七回の逆襲を迎へて「熊倉行かうぜ！」と誘ふ戰友と共に熱鐵一丸となつて敵中に突入したが、逃げようとする敵兵の一人をさし倒した瞬間、眼前に手榴彈の破裂を見た。電擊を受けたやうに右手がしびれるのだ。「やられた」と思つて銃劍を拔き左手だけで持つて更に突つ込まうとしたが自由がきかない。衞生兵に賴んで右手上膊部をシッカリ縛り、銃に彈藥をこめて貰つては左手で擊つた。激鬪數分、今度は左手をやられた。もう銃が持てない。「畜生！」と思つて今度は彈丸集めや運び方に廻つた。この時○隊長の呼ぶ聲が聞えた。「熊倉足がきくなら○隊本部へこの狀況を報告しろ」。命令と共に私は岩角を飛降り麓に向つた。兩手がきかないので殆ど崖や斜面をコロコロ轉がりながら下へ降つた。

○隊本部にかけつけた時はもう全くの無我無中であつたが、私はこの間にも「我々は必ず勝つ」との信念が胸に刻まれてゐたことを忘れない。皇軍の面目はこうしたところにあるのではあるまいか。○隊長は私の報告と共に本部を飛出し不幸飛彈に當つて戰死されたが、我々はこの苦鬪によつて數日後完全にこの山をふみ越えることを得た。

私はこの時の負傷のため遂に內地後送の身となり、實に殘念であつた。だが併し自分としては何等恥づる點なきまで戰ひ得たことを喜びたい。

私は自分が一度も卑怯な振舞をしなかつたことを敢て誇り、この戰爭の經驗を將來に生かして行きたいのだ。

陸軍軍醫少尉　故　小山　巖君

明治四十三年十月十四日生

本籍　大阪府南河内郡柏原町大字柏原八八〇

略歴

一、昭和三年四月　大阪高等醫學專門學校入學
一、昭和八年三月　同校卒業
一、昭和八年四月　大阪帝大醫學部附屬病院耳鼻咽喉科教室勤務
一、昭和九年十月　目黒醫學博士主宰目黒研究所勤務
一、昭和十一年九月　大阪高等醫學專門學校病理學教室耳鼻咽喉科勤務
一、昭和十二年七月　應召

戰歴

昭和十二年七月二十七日召集、同月三十日〇〇聯隊に入隊、即日〇〇野戰病院（〇〇兵團〇〇部隊）に編入、陸軍軍醫見習士官となり第二班治療係を命ぜられた。

同年九月十日、宛平縣城に到着、同十五日同地出發、京漢線に沿ひ目的地に向つて行軍した。この行軍は炎天下の大難行であつた。同君は石樓村で病院を開設し、戰傷患者三十六名を醫官、衛生兵數名と共にこれが看護に當つたが、遂に孤立に陷り、四日間一粒の米なく僅かに芋で空腹を滿たした。これも盡きたので、その後南瓜及豚の水煮で凌ぎ、漸く五日目に粟を發見したがこれも續かず、患者三十六名の空腹を見るに忍びず、兵十名を指揮して苦力百二十名を集め、六、七里餘の行程を逆行、良鄉に移動し、漸く友軍と合し後送の任を完うすることを得たのであつた。

かくの如くして宛平縣城を距る約四十里の易州に約二週間目に到着、ここでも病院を開設活躍し、更に石家莊に到つたが、その間南口、保定、石家莊の各戰闘に從ひ、負傷者を出す毎に病院を開設、文字通り不眠不休の活躍を續け、自ら「相當の勳功を立てたやうです。それに衛生兵で

戰死者も出して居ります。襲撃されたこともあります」と恩師に書信してゐる。

同年十月二十一日石家莊東方北蕉村を出發、正太鐵道に沿つて太原に向つた。爾來、娘子關の天嶮を越え、山西省にさしかゝつて大行山脈の峻嶮を踏破、北小川村に到り、彼我交戰彈雨中に病院を開設、治療に從ひ、十一月三日、〇〇兵團の明治節遙拜式に參加、終つて直に太原攻擊の左翼迫擊隊に從ひ、峻嶮羊腸の山岳路を榆次に向つて前進した。

十一月四日朝、左家庄を出發、馬道嶺三千尺の峻嶮を征服、衞生部隊一同元氣旺盛にて兵團輜重隊の後尾に續行し、午後零時三十分胡封村に到着した。左側南方高地から突如敵の射擊を受け小山見習士官は衞生部隊長に續き先頭行進中であつたが、直に伏して、猛射を避けつつ拳銃をもつてこれに應戰した。然るに午後三時過ぎから敵は迫擊砲、重機關銃等の新鋭な武器で逆襲して來た。

小山見習士官は友軍と共に應戰を續ける一方、既に傷ついた兵に對し手當を與へ激勵する等、亂戰の中にもよくその職責を盡し惡戰苦鬪を續け、敵と接近するや二、三の部下と共に敢然身を挺して敵中に突込まんとした際、不幸第一彈は頭部を貫通したが、その重傷に屈せず、手巾をとり出し、繃帶をして前進を續けようとする刹那、第二彈は上腰に貫通し、遂に力盡きてその場に倒

れ　天皇陛下の萬歲を三唱しつつ護國の華と散るに至つた。

戰功に依り即日陸軍軍醫少尉に任ぜられ、正八位に敍せられ、昭和十三年四月二十四日功五級金鵄勳章、勳六等單光旭日章を賜はつた。

陸軍砲兵曹長　故　中田吉之助君

明治三十七年六月八日生

本籍　東京市下谷區西町四〇

略歴

大阪市北區本庄黒崎町ニ生レタ生粋ノ大阪人デアルガ、十二歳ノ頃父母ニ從ヒ上京、高等小學校ヲ卒ヘ、東京東海堂書店ニ入リ店員トナリ、コレデ身ヲ立テヨウト努力シテ居タガ、不幸十八歳デ實父ニ死別シ自分ノ手デ母ヲ扶養スベキ境遇ニナツタ。ソコデ敢然右店員ヲ罷メ生前父ガ從事シタ上野驛手荷物運搬夫トナリ、營々トシテ倦マナカツタ。ソノ後徴兵檢査ニ合格入營僅カ一年ニ滿タズシテ砲兵上等兵ニ進ミ歸休ヲ命ゼラレタ。除隊後再ビ上野驛デ働ラキ、後間モナク自動車學校ニ入學、運轉ノ技術ヲ修得、東京驛構内貸切自動車ノ配車係ヲ勤メタ。

戰歴

昭和十三年七月六日召されて〇〇聯隊に入隊、約壹月で自動車運轉の特技を認められ輜重兵隊に編入せられ、當初から〇隊長の任を受け出征、同年九月〇〇に上陸、爾來一年有半、北支、中支、蒙疆に轉戰し、北支では新黄河附近の戰闘に徹宵して補給に任じ、中支では或は官亭の惡路を踏破して武漢攻略戰に參加し、或は大別山の嶮を越えて漢水河岸に進出、安陸攻略戰、襄東會戰に參加し、蒙疆では安北附近の戰闘、薩拉齊附近の討伐に參加し、何れも赫々たる武勳を建てた。

昭和十四年十二月敵は冬期攻勢を呼號し、傳作義の自ら指揮する三ヶ師は大擧蒙疆西北部第一線包頭附近に殺到した。偶々同君は十二月二十日包頭北方地區で優勢な敵の重圍に陷つた友軍の急を救ふやうに命を受けたので、部下五名と車輛隊を指揮し、兵力輸送の任務を帶びて安北を出發し固陽に至り、故〇隊長〇〇輜重兵中尉の指揮下に入り、午後一時同所を出發、包頭に向つて前進、同日午後五時頃に至り大廟南方地區に進出した。こゝで重火器を有する千數百の優勢な敵に遭遇し輸送途上の部隊は直にこの敵の攻擊に移つたが、同君は車輛を安全な地帶に移し分隊の

先頭に立つて激戰に參加した。同夜十一時三十分同部隊は再び突如包頭北方十粁三和號東北側附近で四圍から新鋭な敵の逆襲に遭ひ、敵の迫擊砲、手榴彈、自動火器の集中射擊を受け乍ら激戰を交へた。同君は他の分隊と共に〇〇〇隊長を核心として敵中に突入し、白刃を振つて死鬪數刻、翌廿一日拂曉頃敵も次第に動搖の兆を呈し初めたが、尙も頑强に抵抗を續けた。

同君は前夜來常に〇隊の先頭に立ち、一方車輛擁護の處置を講じ、他方第一線に立つて奮戰し、友軍に彈藥の不足を來たした時は彈丸雨飛の間を身を挺して補給の任務を全うする等、その果敢なる行動は實に鬼神を哭かしむるものがあつたと言ふ。

かくの如く亂戰奮鬪中敵の一彈は足部に貫通したが、剛毅な君は毫も屈せず依然任務に從ひ敵の攻擊を繼續中、更に第二彈により右季肋部肩胛下部に穿透性貫通銃創を受けた。君は重傷の爲め再起出來なくなつたのを悟り乍らも何等苦痛を口にせず、その場で貴重品を戰友に托し、十二月二十一日午前八時四十分　天皇陛下の萬歲を三唱しつつ莞爾として壯烈なる戰死を遂げた。（勳功は未發表なり）

陸軍歩兵上等兵　故　谷口猛君

明治四十四年三月二十六日生

本籍　京都市左京區吉田牛之宮町四

略歴

小學校卒業後友染工ニ從事シ、昭和十二年九月應召出征ス

戰　歷

昭和十二年九月北支派遣軍〇〇部隊に屬し出征した。

敵地上陸以來、子牙河、石家莊、滏陽河の會戰等の諸戰に參加し、昭和十三年八月下旬から南京、徐州、漢口攻略戰に加はり、爾來六安落、家集、商城、沙窩に轉戰し、武漢攻略の前哨戰たる大別山々系の激戰に加はつた。

即ち同年十月二十日河南省商城縣洪毛屋基寨附近で猛烈なる拂曉戰展開せられ、同君は常に率先陣頭に立つて攻擊前進し、克く敵の猛射を反擊萎縮せしめた。薄暮に至り部隊長の突擊命令下るや集中射擊を物ともせず、敢然密集した敵軍中へ眞先に突入數名の敵を薙ぎ倒し、血路を開いて味方の進路を開き赫々たる偉勳を樹てた。然るにこの戰鬪に於て不幸敵の迫擊砲に觸れ、名譽の戰死を遂げ、即日步兵上等兵に進められた。

當時の中支派遣軍〇〇本部隊〇〇部隊〇〇隊長の報告に「昭和十三年十月二十日午後八時五十分、敵彈爆發の刹那濛々たる火煙と飛散る土塊の中に倒れ乍らも銃を右手に高く差上げ萬歲を唱するが如き姿を微かに猛煙中に見たり」とあるを見ても、その狀況を窺知することが出來る。

戰功に依り昭和十五年三月二十七日勳八等白色桐葉章功七級を下賜された。

陸軍步兵上等兵　故　義村英夫君

明治四十四年七月十九日生

本籍　奈良縣生駒郡龍田町大字小吉田三〇七

略　歷

一、昭和五年四月　第四高等學校入學

一、昭和六年七月　同校中退、爾來大阪ニ於テ香河會計事務所ニ勤務シ、傍ラ關西大學專門部商科ニ學ビ、計理士トナル。

一、昭和十四年九月　應召

戰　歷

昭和十四年九月十六日補充兵として應召、〇〇聯隊へ入營、同年十一月二十二日出征、中支派遣〇〇部隊〇〇隊に配屬された。

〇〇に上陸、爾來楊子江岸及某重要都市の警備に任じてゐたが、同年十二月中旬から江岸奥地の敵情頓に活潑となり、某地に待期中戰機愈〻熱したので、〇〇隊は同月十七日勇躍第一線に出陣し、義村君も亦これに參加し、兵力優に我に數十倍する大敵の頑强に確保する〇〇高地の夜襲に際し、勇敢にも〇隊の先頭に立つて之に向ひ、友軍の志氣を鼓舞して力戰したが、敵の抵抗は執拗にして、砲、迫擊砲及手榴彈を以て應戰し、吾軍の攻擊に敵屍累々として其の數を知らない狀況にも拘らず、敵は數を恃んで抗戰を續けて來た。

義村君は決死の勢で勇猛果敢に突擊を敢行し、隨處に敵を殪したが、最後の突擊に際し、不幸敵砲彈破片が喉頭部に命中したが、尙ほも屈せず立上らんとしたところ、已に傷深くその場に倒れ、戰友の「シッカリせよ傷は淺いぞ」と呼んだのに對し、「殘念だッ」と連呼し、戰友の腕に抱かれて健氣にも「天皇陛下萬歲」を叫びつゝ十二月十八日午後三時壯烈な戰死を遂げた。

（勳功は未發表なり）

陸軍歩兵上等兵　故　**長濱信市君**

大正二年十一月二十日生

本籍　徳島縣名東郡北井上村芝原一二七ノ一

略　歷

私立泉尾工業學校卒業後、油會社ニ勤務シ、更ニ昭和十一年ニハ石原產業會社ニ轉職、昭和十二年十月應召ス。

戰　歷

昭和十二年十月二十三日應召、同年十二月出征、昭和十三年五月江蘇省徐州附近の警備に就いた。後隴海沿線及碭山附近の警備或は討伐戰鬪に參加、同九月山東省青島附近の警備に從事し、同十月南支作戰に參加、バイアス灣を經て珠江を遡り廣東の側面攻擊に當つた。即ち十月二十三日廣東省東莞縣大角頭島河川中附近の戰鬪で機雷の爆發を受け壯烈なる戰死を遂げた。（勳功は未發表なり）

陸軍歩兵軍曹　**池田正雄君**

大正元年十二月七日生

本籍　大阪市港區九條中通三ノ二九六

略　歷

市岡商業學校卒業後、大阪商科大學ニ入學セルモ、同校ヲ中途退學シテ家庭ニ在リシガ、一年志願兵トシテ入營、成績優秀ナリシヲ以テ〇〇隊ノ斡旋ニテ退營後再ビ大阪商科大學ニ入學シ、同校卒業ト共に〇〇〇〇輸出組合ニ入リ、會計事務並ニ營業部ヲ擔當シテ活躍中、昭和十二年八月應召出征ス。歸還後ハ右組合書記長ノ椅子ニ就ク。

戰　歷

昭和十二年八月一日應召、〇〇聯隊〇〇部隊〇〇隊〇〇隊に屬した。

同月二十一日基地を出發、蘆溝橋追擊戰で保定戰へ進み、更に太原攻略戰に參加し、娘子關の激戰で惡戰苦鬪の果て、昔陽に出で滯留約百日、その間守備、討伐戰に參加し幾多の戰功を樹てた。

次いで同年二月十一日、山西省肅清戰を經て靈石の東方大麥公鎭の戰鬪に參加した。この戰鬪は稀に見る激戰で戰傷者〇隊長以下十一名夜に入つて敵の逆襲猛烈を極めたが友軍よく死を賭して勇戰奮鬪軍旗を始め多數の銃器を捕獲し幾多の武勳を樹てた。

然るに同君は同日午後八時過に至り、先陣を承けて友軍の指揮に奮鬪中不幸敵のチエッコ銃に觸れ、右肩に盲貫銃創を受け、銃丸殘留して右手の自由を失ひ離隊の止むなきに至つた。後野戰病院にあつて加療し、銃丸剔出に成功し銃創も治療したので原隊に歸り、二ヶ月餘新兵教育に從事し、昭和十三年十一月十一日に除隊となつて歸還した。

その間、戰功に依り昭和十三年三月一日軍曹に昇進した。

陸軍歩兵軍曹　**揚井英一君**

大正二年九月二十四日生

本籍　大阪市西區南堀江通二ノ三七

住所　天津〇〇區〇〇綱業所

略　歷

中學校卒業後、大阪ニ於テセルロイド加工職、旋盤工等ヲ轉職シ、其ノ後山口縣都濃郡末武南村所在笠戸島造船所旋盤工ト爲リ、昭和十一年十二月現役兵トシテ入營、事變ト共ニ出征ス。昭和十五年二月除隊、現在天津〇〇〇〇綱業所ニ勤務中ナリ。

戰　歷

支那事變勃發直後、北支に出征、天津の市街戰に參加したのを始めとし、爾來北支の各戰闘を經て山西省に至る山岳戰、太原攻略戰、轉じて徐州攻略戰、黄河作戰等の戰闘並に警備に從事し、昭和十五年二月歸還したものである。

その間、昭和十三年二月、山西省娘子關附近の戰闘で兩足下腿部に貫通銃創を受け、治療の後快癒、原隊に復歸して直に戰闘に加はり、昭和十三年七月二十九日平原附近の山地討伐の命を受け、砲兵部隊掩護の下に一齊攻擊を開始し、夜に入つて逃げる敵を山上に迎へ再び猛烈な突擊を敢行して、山上を占領した。この山上進擊の際、敵彈飛來、同君の左顏頰部に命中、後頭部に貫通し入事不省に陷つたが、治療の後再び全癒、原隊に復歸し、昭和十四年四月頃、北支某地鐵道警備中、右肩部鎖骨々折の戰傷を負ひ三度野戰病院に入院、全快の後更に從軍し、昭和十四年七月初頃、中條山脈附近の戰闘に於て乘馬斥候の任務を帶び、河岸を疾走中、馬の前足が土中に深く突入したる爲め、人馬諸共に巴投の如き狀態で轉倒、馬の下敷となり、四度び右肩鎖骨々折の戰傷を負ひ、野戰病院に入院加療、約二ヶ月の後原隊に復歸、爾後の戰闘に從事し、昭和十五年二月中旬原隊に歸還、除隊後、實家に歸つたものである。

陸軍歩兵伍長　**大森勇吉君**

明治四十四年二月八日生

本籍　香川縣大川郡譽水村大字水主四二四一

住所　大阪市旭區古市中通二ノ一七

略　歷

盡誠中學ヲ卒業後、高松高等商業學校ニ入學シ、同校ヲ二年ニテ中途退學、昭和十二年八月應召ス。昭和十三年九月三十日歸還除隊後ハ株式會社〇〇商會取締役トナル。

戰　歷

昭和十二年八月十八日應召、九月三日〇〇に上陸、班長として金山城と月浦鎭の中間に位置せる集家宅附近の掃蕩戰に參加、奮鬪中、九月八日午前八時頃鐵兜を擊ち拔かれ頭部二ヶ所に負傷した。爾來四十日間に亘つて野戰病院で治療を受けたが、烈々たる誠忠の志は無爲に病床に横臥することを許さず、上長に懇願すること數度、遂に志願を許されて繃帶のまゝ本隊に復歸した。即日第一線に立ち南翔の張巷部落に集結する頑敵に對し、張巷部落一番乘を決行し日章旗は同君の手に依つて城頭高く揭げられたのである。

然るに敵軍は尙も頑强に抵抗し、容易に該部落を放棄せず、クリークを隔てゝ遮二無二發砲し五日間に亘つて我が進路を阻んだので、遂に同十月三十日午後三時頃、敵を一擧に潰滅せんものと、決死の〇隊長を先頭に突擊中、不幸〇隊長は敵彈に倒れたので、今や一隊の責任は同君の双肩に掛つて來た。依つて同君は〇隊長に代つて一隊を指揮せんと立ち上らうとした刹那、敵の手榴彈飛來、飛散する彈片に觸れて左腰部に二ヶ所、背部に縱一寸、幅三寸に餘る負傷を受けその場に倒れた。匍匐擔架を持つて衞生兵が來たが、全身硬直して動かず、敵の砲擊は益ゝ繁く文字通り彈丸雨飛の狀態を呈し、歩行全く不可能で後退が出來なかつた。止むなく傷ついてゐない左

脚に綱を結びつけて後方に牽かうとしたが、意の如くならず遂に天命に委せて敵の射擊の緩むのを待ち、翌三十一日の朝になつてやつと後退することが出來た。

當時、激戰相次ぎ衞生隊の活動も意に委せない狀態であつたので、同君亦假繃帶の儘、擔架の上で廿日間を第一線に過したる後、軍病院に入院治療を受け、昭和十三年一月十四日內地に歸還、同三月廿四日召集解除となつた。

次で昭和十三年九月三十日再び應召したが、負傷が完全に治癒してゐないので即日歸鄉した。

陸軍歩兵伍長　石田重成君

本籍　奈良縣高市郡鴨公村大字飛彈一四二

大正三年六月十五日生

略歴

成育尋常小學校ヲ卒業後、縣奬學費ノ補助ヲ受ケテ畝傍中學校ニ入學シ、三年ニシテ中途退學、爾後二年半商店員トシテ住込奉公ノ後、自宅ニ於テ父ノ古物商ヲ手傳フ。昭和十二年八月應召、同年九月出征ス。

戰歴

昭和十二年八月二十七日應召、〇〇聯隊〇〇中隊に入り、九月七日〇〇部隊〇〇部隊〇〇隊に屬して出征した。

昭和十二年九月十三日〇〇上陸後河北省東西賈庄、安慶屯の戰鬪、東馬村附近の戰鬪に參加、九月三十日獻縣入城、十月十五日相家屯附近の戰鬪に參加、十月二十日から寧晋附近の警備、十一月五日石家莊出發、十一月六日〇〇〇通過、同月七日〇〇〇界通過、同月十日〇〇港出發、同月十四日〇〇〇上陸後福山鎭附近の戰鬪、大通橋附近の戰鬪、寺頭鎭附近の戰鬪、萃野及周村附近の戰鬪、東流鎭附近の戰鬪、堯化門附近の戰鬪、十字街及興衛附近、和平門及下關附近、南京城內外掃蕩の各戰鬪に參加、十二月十五日南京入城、その後南京及堯化門附近の警備に當つた。十三年一月二十八日には鎭江出發、その後祁村附近、山口附近、臨城附近に轉戰して四月九日から二十日迄徐州會戰に參加、その後尉氏附近に戰ひ尉氏東側地區の渡河戰並に掃蕩戰に參加、九月四日から二十九日迄、漢口附近の會戰に參加したが、二十九日午後二時頃河南省商城縣沙窩北方高地附近の戰鬪中、左鎖骨上窩部左肩胛間部貫通銃創を受け〇〇野戰豫備病院に入院した。現

在は內地に還送され臨時〇〇陸軍病院に入院加療中である。

昭和十二年七月十一日、昭和六年乃至九年に於ける滿洲事變の功に依り、勳八等旭日章を授與され、一時金二百七十圓を下賜された。

陸軍歩兵上等兵　八田茂君

明治四十一年十一月廿七日生

本籍　岡山縣久米郡大井西村大字中北上五四

住所　大阪市住吉區粉濱中之町二ノ一二

略歴

實父ノ死去ニ依リ大邱中學ヲ二年ニテ中退シ、本籍地ニテ鐵工所ニ就職、更ニ大阪ニ出テ兒玉發動機製作所、水田鐵工所等ニ於テ旋盤工トシテ勞働ニ從事シ、昭和十二年八月應召出征ス。

戰　歷

昭和十二年八月應召、〇〇聯隊に入隊、〇〇部隊に編入、同月十五日北支〇〇に上陸爾來津浦線濁流鎭、靜海縣附近の戰鬪に參加したのを始めとし、陳官屯、唐官屯、滄州、德州、陵縣、臨邑、高唐、禹城附近の戰鬪に從ひ、更に黃河渡河戰及濟南攻略大戰鬪に參加し、進んで兗州、曲阜南驛、滕縣、臨城、台兒莊の各戰鬪を經て、微山湖渡河戰、徐州附近の各戰鬪並に徐州攻略後の追擊戰鬪、黃河三角地の討伐並に警備、漢口攻略戰、漢口攻略後の要陸附近の討伐並に警備に從ひ、更に轉じて石家莊附近の警備及京漢線津浦線中間地區の討伐戰等に參加、その間約一年八ヶ月に及ぶ。

右轉戰中、昭和十二年九月四日、唐官屯附近の拂曉戰に從ひて奮戰中、午前八時頃敵砲彈其の附近に落下し左膝蓋軟部に砲彈破片創を負ひ、野戰病院で加療、全治には至らなかつたが步行に支障がなくなつたので、前進のため原隊に復し、爾後の戰鬪に從ひ、その後昭和十三年八月二十一日漢口攻略戰中再び大腸炎のため入院、同年九月十七日全快して原隊に復歸し、戰鬪に參加、昭和十四年三月石家莊附近の警備並に討伐戰に從事中更に左側化膿性中耳炎に罹り〇〇〇陸軍病院に入院加療したが全治に至らなかつたので內地に還送され同年七月中旬〇〇陸軍病院で治癒し原隊に復歸したが同月二十二日召集解除になつて歸還した。

陸軍步兵上等兵　**伊東豐饒君**

本籍　鳥取縣東伯郡上北條村大字新田一七四　明治四十二年九月十八日生

住所　大阪市天王寺區西高津中寺町一四

略　歷

農家ニ生レ、僧侶トナリ、中學卒業後、駒澤大學ニ學ビ同學卒業、目下ハ大阪市天王寺區〇〇町〇〇庵住職デアル。資性溫厚信望高シ。

戰　歷

昭和十二年八月五日應召、〇〇部隊〇〇部隊〇〇隊に屬し同年十月頃から〇〇部隊〇〇隊に變る。

津浦沿線の戰鬪中、二堡、王口鎭、東、西子牙鎭、唐官屯の攻擊に參加し、更に馬廠附近の攻擊中東辛莊、南趙扶鎭附近、滄縣附近、平原附近の攻擊にそれぞれ參加した。

黃河北岸の掃蕩作戰中、堤裏橋、安仁街、郭莊、齊河附近の攻擊に參加し、黃河渡河作戰第一期中には南鎭附近の掃蕩に參加し、更に黃河渡河作戰第二期中には黃山店附近の攻擊に參加した。

又濟南より濟寧、鄒縣の線に向ふ追擊作戰中には山石台附近の攻擊に參加し、山東省西南方地區の反擊作戰中には兩下店、兩下店南方地區の戰鬪に參加した。

續いて南部山東省勦滅作戰第一期中、界河、南沙河、湲村、台兒莊の攻擊に參加し、昭和十三年四月十日午後九時頃、山東省曹庄附近の攻擊中、右頰部、兩大腿部、左膝關節部、右環指に手榴彈の破片創を受け、內地陸軍病院にて切開手術を受け破片を摘出し、昭和十三年八月十七日治癒退院し、陸軍步兵上等兵下士官適任證を附與され除隊す。

陸軍輜重兵一等兵　**稻葉三吾君**　明治三十五年一月十八日生

本籍　三重縣阿山郡丸柱村大字比曾河內一三

住所　大阪市旭區大宮町一ノ一

略　歷

高等小學二年中退、其ノ後旋盤工トシテ生活シ、昭和十二年八月應召出征ス。

戰歷

昭和十二年八月二十五日應召、同年九月出征、北支豐臺から進發し、石家莊、陽河附近の會戰に參加し、宋哲元軍の掃蕩戰に從ひ、次いで河北省南部及山東省西部等を轉戰、更に石家莊警備勤務を經て、山東省司凹附近の戰鬪に參加、山東省東南部及河南省武安縣西部崇義附近の戰鬪に從ひ、更に占領地の肅淸戰に參加、其の後山西省東南部潞安附近の警備勤務に服したがその後徐州會戰に臨んだ。

昭和十三年五月二十八日、徐州會戰に於いて奮鬪中、右足關節に捻挫を起し、次で坐骨神經痛を併發、內地陸軍病院で加療の後、同年十一月上旬召集解除歸宅したが、今日尙ほ春秋及嚴寒の候苦痛を覺える狀態である。

陸軍步兵少尉 故土淵兼松君

明治四十四年一月一日生

本籍 舞鶴市字眞倉五八一

略歷

一、昭和三年三月　京都府立舞鶴中學校卒業
一、昭和三年四月　東京高等師範學校（物理化學科）入學、同六年退校ス
一、昭和六年十二月　〇〇聯隊ニ入營シ幹部候補生トナル
一、昭和八年一月　國民精神文化研究所ニ入所ス
一、昭和九年四月　東京高等師範學校ニ復學シ、昭和十年三月卒業ス
一、昭和十年四月　山形師範學校教諭ニ任セラル
一、昭和十二年八月　充員召集

事變出動以來〇隊長として各地に轉戰常に偉功を樹てた。

即ち北支に於ては〇〇部隊の尖兵長として子牙河右岸に沿つて前進中、有勢なる敵が王反場西方陣地に在るを知るや直に之を攻擊し、部隊爾後の戰鬪指導を有利ならしめ、劉各庄附近に於ける敵の死命を制するを得しめた。上海方面に轉進するや昭和十二年十一月廿一日〇〇兵團追擊隊尖兵長として最も勇敢に安鎭附近に寄る約五〇〇の優勢なる敵に對し、獨斷攻擊を開始し、爾後部隊が逐次に戰鬪に加入するや率先安鎭東側クリークの敵に突入して格鬪の末該橋梁を確保し、爾後部隊の追擊に於ても常に最先頭に在つて勇進した。

同二十二日吼口山の攻擊に於ては左第一線としてクリークの障碍を排除し、適切なる機眼に依り、頑强に抵抗する本道上橋梁の敵の機先を制して突擊し、更に吼口山の南中腹山壘による有勢なる敵に突擊し、山頂を占領した。部隊は更に本道に沿ひ追擊、其の尖兵〇隊東亭鎭附近の敵と遭遇するや、〇隊は波家住附近に於て敵の側背を攻擊すべき命を受け分進し、〇〇隊を西介庄北側地區から、主力を南側地區から前進せしめて當面の敵を攻擊した。土淵少尉は熾烈なる敵火を

冒して敵前至近距離に近接し精細なる偵察をなし、適時隊長に報告し、爾後の戰鬪指導を極めて有利ならしめた。

同二十四日第二回突擊隊長として、敵第一線を奪取するや、直に第一回突擊部隊と交代し、敗退する敵に追尾して獨立家屋に據る敵に突擊し、自ら軍刀を振つて敵數人を斬り、進んで前方火點に突擊して之を奪取し更にクリークに沿つて猛烈な追擊を行ふ。この間部下の從ひ得たもの數名であつた。然れ共少尉は日頃演練せる陣內戰の妙を發揮すべき秋であると決意し、寡勢を以て畑中堆土上にある有勢なる敵第二線火點に突擊し、遂に敵の投擲せる手榴彈の爲部下諸共身に數十箇所の爆創を受くるに至つた。然れども之が爲續行せる隊主力はこの敵に猛烈なる突擊を敢行して該陣地を奪取し、東亭鎭第一線陣地を潰滅せしめた。少尉は其の瀕死の重傷であることを知るや陛下の萬歲を三唱したる後昏睡狀態に陷つたが、運れて隊繃帶所で漸く意識を回復した。

衞生兵が手當をしようとすると部下の名を呼んで其の安否を問ひ、戰傷した部下から先づ處置するように命じた。

嘗て山形師範に教鞭を取つてゐたが、召されて野戰隊に加はり、孜々として軍事の研究を行つた。其の遺書に曰く「帝國の內外益々多難なるの秋微々たる短軀獨り報するを得ば身を鴻毛に置

くべきの時至尊の爲誓つて身命を賭して勇進せんとす」と。以て平素の氣魄を知ることが出來よう。死に瀕するも自己を顧みず、思を部下に致す眞情に至つては鬼神をも慟哭せしむべく、寔に軍人精神の精華と謂ふことが出來る。惜くも昭和十二年十二月四日〇〇野戰病院に於て遂に戰傷死した。

功により昭和十二年十二月四日歩兵中尉に任ぜられ、從七位に敍せられたる上、勳六等單光旭日章、功五級金鵄勳章拜受の榮譽を擔ふ。

隊長の手紙（尊父宛）

御遺族様　此度天地にかへ難き御令息を失はれ候御兩親様始め御一同様の御心中嘸々御哀愁の御儀と御察し申上候。私儀出征に方りて、あの〇〇の將校室に於て皆様方に御眼にかゝり吳れ吳れも御依賴に預りしに拘らず、御期待にそむき只々御詫び申上ぐる次第に御座候

御奮戰の御有様は別紙に御誌し申候間何卒御賢察下され度、拙文にて其の眞を御傳へし得ざるを恨み申候

出征以來共に生死を誓ひ、北支に上海につぶさに辛苦を分ち申候處、二十四日の突擊にとう御戰傷、當時を回想して斷腸の念に堪へず候

、しかし乍ら、其の御終始は實に御立派にて我々如きものとても遠く及ばず、〇隊の兵は勿論全部隊の將兵等しく敬仰せし所に御座候殊に部下を遇せらるゝことの篤きことは部下一同が心から感謝致しおる次第に御座候

御勇敢なりし有様は常に私が「土淵勇敢すぎるもう少し自重して吳れ」と口癖の様に注意申上げし程にて敵彈下に在つては全く神の如き御態度に御座候最後の御突擊には我等後れて不覺を取りし程に御座候突擊の時私が「第〇〇隊はどうした〳〵」と呼ばゝりますと「第〇〇隊はもう前へ出られました」といふ兵の聲、かくする内に前方より兵が駈け歸つて「第〇〇隊長がやられました。外に〇隊長も兵も少くも五、六名はやられました。」との報告、愕然爲す所を知らなかつた様な有様にて、様子を聞き候處桑畑を縫うて前進せらるる途中、その眞中の堆土に迫られし時、敵がその小山の後から手榴彈を投げたとの事、日も漸く暮れ決死の兵を選んで〇隊長始め負傷者を收容致し候

その時の情なかつたこと今猶殘念で〳〵「土淵しつかりして吳れ土淵」と名を呼び候處、眼をつむつたまゝ「〇隊長殿濟みません」と一言いはれ「早石はどうした、大西、大槻、吉岡、上林」とその時ついて行つてゐた兵や〇隊長の名を順序に呼ばれ「大槻や大西は俺より重い、

先へしてやつて呉れ」と衛生兵に指圖され爆創の爲痛む傷をじつとこらへ居られ候姿はほんとうに神々しく思はず頭を下げ申せし次第に御座候

殊に御秀才にて將來大に教學の爲御盡しあるべき御身を思へばかくまで立派な御子様をなくせられ候御兩親様の御無念一入御深きことゝ存じ御慰めの言葉も無之候

土淵少尉殿御夫人に對しては衷心より御同情申上ぐる次第御兩親様よりも何卒よろしく御慰め頂き度願上候

先は右取敢へず御通知申上度如斯御座候

敬具

昭和十三年一月七日

○隊長　森　英　生

土淵少尉御遺族様

陸軍歩兵上等兵　故　中原猪之次君

明治四十四年十一月一日生

本籍　熊本縣天草郡久玉村二八七六

略歴

一、大正十五年三月　高等小學校卒業
一、大正十五年三月　神戸ダンロップゴム會社職工
一、昭和三年五月　神戸市所在貿易商會荷役手
一、昭和十年七月　省線灘驛荷役手
一、昭和十三年八月　應召

戰　歷

昭和十三年八月三十一日應召出征、同十四年二月十四日、敵軍を急追しつゝ〇〇附近に到着せる君は、激戰の疲れもものかは愛馬のために藁の採取に出掛け、敵の遺せる手榴彈の爆發のため無念にも再び立つ能はざる重傷（腰部穿透性手榴彈破片創）を受け、翌十五日野戰病院で戰傷死を遂げた。（勳功は未發表なり）

陸軍歩兵一等兵　故　八木豊吉君

明治四十年五月二十二日生

本籍　滋賀縣犬上郡高宮町本町

略　歷

一、大正十二年三月　高等小等校高等科一年修了
一、大正十三年五月　私立平安中學校二年中退
一、大正十三年七月　神戸リーム會社職工
一、大正十五年九月　川崎造船所職工
一、昭和十二年八月　應召

戰　歷

昭和十二年八月二十九日應召出征、北支に於て轉戰中、滿洲チブスに罹り、同年十二月三日現地陸軍病院で死亡した。戰功に依り歩兵一等兵に昇進す。

一

陸軍歩兵一等兵

林　勝　芳君

明治四十三年四月二十三日生

本籍　神戸市林田區久保町三ノ一七

住所　尼崎市今福太田一四

略　歷

一、大正十二年三月　尋常小學校卒業

一、大正十二年四月　郵便集配手

一、大正十四年二月　神戸ダンロップゴム會社職工

一、昭和九年十月　尼崎市所在鐵工所職工

一、昭和十三年九月　應召

戰　歷

昭和十三年九月〇〇隊に入隊、同十三年十二月中支戰線に參加、九江、小池口方面に於いて警備中同十四年十一月七日敵彈のため右脚腓骨骨折の負傷を受け、現地兵站病院に入院、後〇〇陸軍病院に轉じ內地送還となる。然して除隊時の階級は步兵一等兵であつた。

陸軍步兵軍曹　故　國見善弘君

大正五年七月七日生

本籍　高知縣幡多郡中筋村磯ノ川

略　歷

一、昭和六年三月　中筋村尋常高等小學校高等科卒業
一、昭和六年四月　農業ニ從事
一、昭和七年九月　中筋村消費組合事務員
一、昭和十二年八月　應召

戰　歷

昭和十二年八月〇〇部隊に屬し、中支に出征、〇〇に敵前上陸を爲し、八月二十四日からの羅店鎭攻擊の際、〇〇隊連絡班長として活躍、以來各地の戰鬪に參加、九月二十二日、周家宅前方に於いて右鼠蹊部貫通銃創を受け戰死した。

戰功に依り昭和十二年九月十日伍長に任ぜられ、九月二十二日軍曹に進級、勳七等青色桐葉章、功六級金鵄勳章を賜はつた。

戰友の手紙（兩親宛）

拜啓遠く征途の空から懷しい故國の秋空を偲びつつ國見君の戰死當時の赫々たる武勳を御通知致します。私は山奈村出身の土居と云ふ者で御座居ます。國見君とは親しい戰友であります。同じく互に一死奉公を誓つて故鄕を後に征途に登つたのであります。〇〇の敵前上陸に成功しそれ以來六晝夜程不眠不休の戰鬪で羅店鎭を占領しました。私も最後の決心をし、國見伍長殿と手を握り合つて最後の奮鬪を誓つたことも五度六度、又ある時は五、六米の前方から輕機の亂射を受け漸く難を逃れたこともありました。約一ヶ月間私達は常に第一線に立つて砲煙彈雨の中をくゞつて奮戰しました。

九月二十一日より〇〇方面の總攻擊で、二十二日は最も激戰でございました。〇隊長殿から私達の隊に前方の敵の主陣地を本日中に占領せよとの命令が降りましたので、〇隊長殿は部下を集めて「皆御苦勞であるが前方の主陣地へ突擊する」といつて一升の淸酒を下さり「この酒は神酒だから之を分ち日本精神を分配して戰ふ」といつて酒をつぎ合ひ、いよ〳〵命令一下突擊前進に移りました。

一同は身輕な服裝に替へ、散兵壕を利用して敵陣地に迫り、發煙筒を抱いて進み、ワッと喚聲を擧げて敵の陣地に突入しました。敵は驚いて前方側方より我が部隊に對し一齊射擊の十字砲火をあびせかけ、文字通り敵彈は雨霰と降りました。この日この時、最前線にあつて近よる敵を突き倒し〳〵連絡をとつて奮鬪中であつた伍長殿には不幸敵彈を受けられ、「無念」の聲と「天皇陛下萬歲」の聲を我々戰友に殘して壯烈なる戰死をせられたのでございます。私も暫く地に伏し伍長殿に默禮してゐましたが、「ヨウシ、敵を討ちます」と突入して十餘名を突きさし、國見伍長の仇をとりましたが、私も右頸等に負傷しました。國見君の戰死せられたのは九月二十二日午後四時頃と思ひます。（後略）

十月二十四日

故陸軍歩兵伍長國見善弘君の御兩親樣

土居富市

陸軍衛生兵上等兵　故

西原西平君

明治四十五年三月二十五日生

本籍　高知市北奉公人町二二〇

略歷

一、昭和二年三月　高知市立尋常高等小學校高等科卒業

一、昭和二年四月　古物商手傳

一、昭和八年九月　大阪南海電車倉庫係勤務、同十一年六月退職

一、昭和十二年八月　應召

戰歷

昭和十二年八月〇〇隊に應召、〇〇野戰病院に編入、〇〇に上陸、以來各地に於いて激烈なる軍務に從事中、鐵宅にて赤痢により野戰豫備病院に入院、爾來靜養中であつたが、同年十一月八日赤痢で死亡した。戰功に依り昭和十五年五月勳八等に敍せらる。

陸軍歩兵上等兵　三木常綠君

明治四十四年十一月一日生

本籍　高知縣長岡郡新改村八三五

住所　東京市中野區新井町三九　子田一郎方

略歴

一、昭和六年三月　高知高等學校卒業

一、同　年四月　京都帝國大學經濟學部入學

一、昭和八年五月　右退學

一、昭和十年一月　〇〇聯隊へ入營

一、昭和十一年七月　右除隊、歩兵上等兵

一、昭和十二年五月　京都帝國大學へ復學

一、同年八月　應召出征

一、昭和十三年九月　除隊、京都帝國大學へ復學

一、昭和十五年三月　右卒業

一、同　年四月　日本〇〇株式會社へ勤務

戰　歷

昭和十二年八月〇〇部隊に屬して中支に出征し、川沙鎭にて敵前戰鬪に參加、傷を負うて內地還送となり、〇〇海軍病院、〇〇、〇〇、臨時〇〇陸軍病院等に轉送、昭和十三年九月三十日兵役免除となり十月八日退院除隊した。

陸軍歩兵上等兵　**古田豊一君**　大正三年二月十一日生

本籍　德島縣美馬郡半田町字田井一〇七
住所　同縣同郡同町字東久保九五三

略　歷

一、昭和二年三月　半田町尋常高等小學校高等科卒業
一、昭和二年四月　菓子製造見習
一、昭和二年十月　神戸市電氣局市電車掌見習
一、昭和十二年八月　應召
一、昭和十五年四月　除隊

戰歷

昭和十二年八月出征、上陸戰鬪に擲彈筒手として部隊進擊に非常な效果を奏したが、馬家宅附近の戰鬪中、後頭部に擦過銃傷を受け、約五十日間野戰病院に入院、退院後再度第一線に進出、南翔より太倉の進擊戰鬪、更に太倉より無錫占領に至る戰鬪に擲彈筒手として勳功を樹てたが、昭和十二年十一月二十四日、無錫占領直前の戰鬪に於いて口腔部貫通銃創を受け野戰病院に收容され、その後內地各陸軍病院に轉送、療養中、前記銃創に依る機能障害に依り昭和十五年四月二日步兵上等兵にて兵役免除となつた。

陸軍步兵伍長 故 花井利文君

本籍 三重縣一志郡天白村大字會原一九二八　大正元年十二月十日生

略歷

一、昭和二年三月　三重縣一志郡天白村尋常高等小學校高等科卒業
一、同　年四月　神戶市神戶製鋼所ニ入リ旋盤工トナル
一、昭和十年十二月　〇〇聯隊ニ入營、滿洲守備ノ任ニ就ク
一、昭和十一年七月　內地歸還
一、昭和十二年九月　應召

戰　歷

昭和十年十二月〇〇聯隊に入營し、直に滿洲守備となつて渡滿、同十一年七月、內地に歸還し、滿洲事變從軍記章を授與せられたが、今次支那事變勃發するや昭和十二年九月、〇〇部隊〇〇部隊〇〇部隊〇〇隊に屬して出征、江南並北支の戰野を轉戰し、徐州會戰に際して昭和十三年五月十三日午後七時五十分山東省金鄉縣孫家菜園附近の戰鬪に於て第一線に立つて奮戰、敵の城壁數十米に肉迫突擊に移つた際、敵彈頸部を貫き、遂に名譽の戰死を遂げた。

同人は出征に際つて、

「今度のことは（出征を指す）殊勳を立てゝ金鵄勳章を貰つて歸るか、戰死するか、の二つの一つだ」と決意の程を近親に洩したといふ。

戰功により

一、昭和十一年七月十日、昭和六年乃至九年事變從軍記章を賜はる。

二、昭和十三年五月十三日、勳八等白色桐葉章、功七級金鵄勳章を賜はる。

弟への書翰

四月二十八日朝早く四時半に起き出で戶外に出ると、星の光薄く輝き、道眞暗き頃我が〇隊は濬縣の拂曉戰に參加した。

正面より〇〇〇隊一ヶ〇隊が攻擊を開始しました。我が〇〇隊は第一線攻擊となつて縣城の東側の高地を攻めた。今迄は南京入城以來戰鬪らしき戰もなく、殘敵の追擊でありましたが、今日の敵は第二十九路軍で我が軍の後方連絡切斷任務を帶び黃河を渡つて一萬五千の兵力です。銃聲を聞くと鬪ひ氣分が溢れて來ます。然し奴さん等は便衣を持つてゐて部落民の樣に周圍を歩んでゐるので見わけるのに相當骨が折れます。亦砲彈が傍に落ちても走らずに、ぼつ〳〵と歩いてゐる姿が見えてゐます。我等は一度に射擊をして敵を倒すのです。隨分に面白い思がします。考へてゐると頭上を敵彈がヒユウ〳〵と飛來して來ます。突擊前になり、トーチカも落ち、重砲の援護射擊も終り、高地占領に上つて行くと、支那兵の死體が隨所に點々と存在してゐます。山の向ふには退却する支那兵の姿が見えますので、早く上つた者から五六間位にて射つて射つて射ちまくりました。一〇隊警備に殘つて山を降つて來ると支那兵が崖にかくれてゐますので、銃劍にて芋ざしにしました。逃る敵を追ひつゝ縣城の南方に到り、此の高地を攻めました。立派なる寺院にトーチカを作り、壕を掘り、强く抗ひました。散兵壕は小高い所に掘

り、寺院には三四十もあるのです。
西南方に去る敵を射ちに射ちました。南方には味方が一ケ〇隊居りまして盛に砲聲が聞えて來ます。
陽が西方に傾むく頃〇隊命令にて城内に到る。亦、〇隊の移動の際に殘敵が宵闇を利用して逃れるのに遭ひ、皆殺しにしたが、その數は澤山なものでした。
此の夜は一夜中、城壁の上にて敵の逃れるのを見ては、逃げ様とするのをボン〳〵と射ち殺しました。亦多數の場合は手榴彈にて皆殺しにしました。敵をつかまへたことは大變なものでした。お前も元氣で何よりです。幸兄様からも三月二日付の手紙を頂きました。家の方からも度々頂いてゐます。私も元氣にて軍務に勵んでゐます。亦彰德にて撮つた寫眞が出來ましたら御送り致します。先づ先づ御元氣にて。

五月六日夜記す　　草々

弟へ　　北支の兄より

陸軍輜重兵上等兵　故　**鈴木泰悟君**　　明治四十五年二月十三日生

本籍　三重縣三重郡四鄕村大字室山二〇七

略歴

一、大正十三年三月　三重縣三重郡四鄕村尋常小學校卒業
一、昭和四年三月　三重縣立富田中學校卒業
一、昭和五年三月　大阪外國語學校ニ入學シ、同七年十二月同校ヲ中途退學ス
一、昭和十年以降　東京ニテ文筆生活ヲ爲ス
一、昭和十二年八月　應召

戰　歷

今次事變勃發するや昭和十二年八月三十日應召出征し、北支派遣軍〇集團兵站監部〇〇兵站支長〇〇部隊所屬となり、北支戰線を轉戰したが、偶々昭和十三年三月十六日山西省路城縣神大村附近に於て、糧秣輸送任務中、優勢なる敵の大部隊と遭遇し、數時間に亘る激戰を展開するや奮戰突進、衆に率先白兵を以て血戰力闘したが、不幸敵手榴彈と小銃彈に中り　天皇陛下の萬歳を唱へたまゝ壯烈な戰死を遂げた。

戰功により、昭和十三年三月十六日、勳八等白色桐葉章、功七級金鵄勳章を授與さる。

戰友よりの手紙

前略　陳者當〇隊は去る三月十六日夜糧秣輸送の重大任務を受け〇〇地より目的地に向ひ、勇躍行進中、何しろ山西の山々は起伏重疊にて或は高く或は低く、實に文字通りの嶮路にて、ともすれば倒れ勝ちなる馬を鞭打ち勵まして難行軍を續け、〇〇地に差し掛つた際、突然迫擊砲、重輕機、手榴彈の一齊射擊を受け、敵の主力我に對する數十倍、其の戰線行程一里餘に渡りたるが、吾々は之に包圍隊形を以て對戰したるところ、地形の不利なると武器の少い輜重隊の事故今は之までと覺悟を決め、命の續く限り銃身の燒けん許りの勇戰奮闘をなしたるも、益々增加する敵の主力に衆寡敵せず、剩へ數知れたる彈丸もなくなる樣にて、終には路上の白兵戰となり、敵彈に倒れつゝも、「天皇陛下萬歳」を叫ぶ悲壯な聲が其處此處に起る。

時に泰悟君の銃身は飴の如く眞赤になり、彈丸も凡て射ち盡されし爲今は之迄と彈丸の亂れ飛ぶ中を突擊又突擊、午前一時に及びし頃、同君は腹背に敵を受け、勇敢に前面の敵一名を見事に刺し殺された時、卑怯にも後方より敵が投げたる手榴彈に足部を傷けられ、自由を失ひ乍らも第二の敵に向はんとせられし時、飛び來つた一彈に無念にも頭部をやられ　「天皇陛下萬歳」を一唱、遂に護國の鬼と化せられました。其の時の勇壯なる有樣は、實に鬼神も泣く程でした。其の有樣は吾隊全員の胸に深く燒きつき感謝感激の的となつてゐます。こゝに謹みて御哀悼の意を表します。

昭和十三年四月十日

法藏寺樣

〇〇部隊〇〇部隊

平井祥雄

陸軍歩兵軍曹　故　佐々川定次郎君

明治四十五年二月二十七日生

本籍　福井縣福井市佐久良下町九七

略歴

一、昭和五年三月　福井縣立福井中學校卒業
一、昭和七年三月　第一高等學校理科二年修了
一、昭和十年一月　〇〇聯隊ニ入營、同十一年十二月伍長トナリ除隊、自動車業ニ從事ス
一、昭和十二年九月　應召

戰歴

昭和十二年九月十二日歩兵伍長として應召、〇〇聯隊〇〇〇隊〇〇隊〇〇隊に編入され出動した。同年十月二十六日未明上海附近の戰闘に於て、下士斥候として敵情偵察に赴いたが、敵前十五米の地點で敵機銃の掃射に遭ひ、其際、左側胸部右肩胛骨に貫通銃創を受け（江蘇省寶山縣仙師廟に於て）戰死した。戰功に依り勳七等功六級を下賜された。

陸軍歩兵上等兵　故

伊藤重男君

明治四十年十二月九日生

本籍　福井縣大野郡富田村下唯野三八號二

略歴

一、大正十三年二月　福井縣立大野中學校四年ニテ中途退學ス
一、昭和四年一月　〇〇聯隊ニ入營
一、昭和七年五月　除隊
一、同　年六月　富田村酪農組合牛乳取扱所事務員トナリ、同八年二月ヨリ農業ニ從事ス
一、昭和九年十月　福井縣勝山郡早谷川機業會社ノ職工トナル
一、昭和十二年九月　應召

戰歴

昭和十二年九月十七日〇〇聯隊に應召。同月二十三日征途についた。
同月二十九日〇〇敵前上陸。同年十月二十五日午後一時二十五分江蘇省寶山縣南張村附近に於て頭部貫通銃創を受け戰死した。
戰功に依り同十三年十月二十五日勳八等功七級を下賜さる。

陸軍歩兵上等兵　故　蓑輪郁彦君

本籍　福井縣今立郡味眞野村池泉十九號六　明治四十二年七月十六日生

略歴

一、昭和二年三月　福井縣立武生中學校卒業
一、昭和四年四月　法政大學豫科入學、二年ニシテ中途退學ス
一、昭和十一年九月　福井市所在武生無盡株式會社事務員ト爲リ、同十三年二月病氣ノ爲メ退社ス
一、昭和十三年九月　應召

戰歴

昭和十三年九月十一日歩兵補充兵として〇〇聯隊に應召。昭和十四年四月一日中支派遣〇〇部隊に屬し、〇〇部隊〇〇隊に參加活動し、同十四年五月二十三日午後四時三十分中華民國湖南省岳陽縣陳家庄西方高地附近の戰鬪で戰死した。

戰功に依り十四年五月二十六日功七級(年金百五十圓)勳八等白色桐葉章を下賜さる。

故陸軍歩兵上等兵蓑輪郁彦戰死の情況

〇〇〇隊〇〇〇隊長歩兵少佐　武田丈夫

昭和十三年十二月二十二日半樓司に於て〇隊に編入以來、整備、討伐、鐵道巡察等、凡ゆる繁劇なる業務に頗る眞摯熱誠、積極的に精勵せり。

新墻河及大雲山附近の戰鬪に參加するや、五月二十二日午後四時三十分陳家庄西方高地攻擊に際し小銃手として頗る果敢に行動し、〇隊長、宮下伍長と共に〇隊の先頭に立ちて突進し、正に敵陣に突入せんとする刹那右側背よりの敵火を受けた胸部背部の重傷の爲、壯烈極まる即死を遂げた。

六月三十日

陸軍歩兵伍長 故 **青木文次君**

明治四十一年十月三十一日生

本籍 富山縣射水郡二塚村一七七

略歴

一、大正十五年三月　富山縣立高岡中學校卒業
一、昭和四年三月　富山高等學校卒業
一、昭和八年三月　名古屋醫科大學卒業
一、昭和九年一月　〇〇聯隊ニ入營
一、昭和十二年十一月　應召

戰歴

支那事變勃發するや、昭和十二年十一月二日名譽の應召を受け、〇〇部隊補充要員として出征し、〇〇灣の敵前上陸に參加して以來、南京攻略戰、徐州攻略戰其の他の戰闘に參加、赫々の武勳を樹て、更に武漢攻略戰に參加奮戰したが、昭和十三年九月十九日の夜、中華民國江西省瑞昌縣下曹附近の戰闘に於て頭部貫通銃創(頸部背髓損傷)を受け、〇〇野戰病院に後送されて加療中同月二十七日午後五時十分遂に護國の鬼と化す。

戰功に依り昭和十三年九月二十七日勳八等功七級に敍せらる。

隊長よりの書簡(父君宛)

(前略) 〇〇部隊は〇〇部隊の豫備隊となり追擊を續行す。九月十八日〇〇後方を前進中〇〇部隊は敵の逆襲を受け〇〇隊は〇〇命令に基き、下曹道を〇〇に向ひ前進す。されど道路險惡にして行進速度進捗せず、加ふるに風雨激しき闇夜を前進すること數時、〇〇に到着せしは二十三時なり。已むなく〇〇に露營す。翌朝天明と共に同地出發、九月十九日七時卅分〇〇着、直ちに南方〇〇の高地を占領、其南方に對し警戒せり。伍長(文次君)は克く〇隊長の命令を守り、難

路の行軍に堪え、雨中〇〇〇の嶮を踏破し、南方警戒に従事す。然るに十五日頃チエッコ銃を有する約〇名の敵、濃霧をつき逆襲し來る。小隊は直ちにこの敵に對し猛射を浴す。戰闘約三十分にして右より迂回攻撃せる〇〇〇隊の不意の射撃により、之に抵抗することを得ず遺棄死體二十數個を殘し敵は東南方山地に敗走す。

此の間、升谷上等兵（戰死）は大腿部に貫通銃創を受く。伍長は敵火熾烈なる内に在りて從容として受傷患部に應急處置をなし、次で下出上等兵受傷するや、又も敵彈下に身を曝し之を收容中、敵一彈は伍長の頸部を貫通したために伍長はその場に倒る。

以上の如くにして直ちに〇〇〇部隊軍醫の應急處置を受けました所、何しろ急所のことゝて、早速後送するやう準備したのですが、御子息は身醫師のことですから、自身の容態について餘りにもよく分明せる樣で、餘命幾何もないことを自覺してか、如何に後送することを申傳へても聞入れず、〇隊長の傍に瞑すべきを希望して止みませんでした。依つて據所なく〇隊長小生及び看護兵と三名、〇〇の一軒屋にて夜を明したのです。然るに天明頃より全身不隨なりし手足が少しつゞ動き得るやうになり文次君は或は癒るかも知れないと思つたのか、小生等の再三の勸めに野戰病院に後送收容することを納得して、五、六里後方の野戰病院に收容したのであります。當時診斷した軍醫の言によれば、七八分迄は助かるだらうとの事でした。

其後小生等は日々頑敵を追擊して十一月十一日遂に目指す岳陽を陷れたのです。しかし退院せし其後の〇隊復歸者ある毎に、青木君の入院後の狀況を尋ねましたが不明にて、唯一名、瑞昌に向け後送中の文次君に逢つたと言ふ者があつたきりでした。それも途中、擔架の中から顏を出して、幹部の方によろしく、氣分も良い樣ですとの言傳があつたのみでした。しかるに先頃突然死亡證書を受領し、〇隊長始め一同聲もなく、其日直ぐ〇隊の神棚前に陸軍歩兵伍長青木文次君の新らしき英靈を迎へて御參りしたのであります。遺言狀にもある如く負傷當時の樣子は如何にも武人としての態度を衿持し、從容として迫らず、身の苦痛は一言も漏らさず、幹部一統の武運長久を祈つて、今度の御召に預つて以來、常に今日あることを覺悟して居られた樣に想像され、滿足して後送されたのです。唯々心の餘りに氣高きに感服して居る次第であります。（後略）

〇〇隊、〇〇隊

西村准尉

陸軍歩兵軍曹　**島田幸太郎君**

大正二年一月三十日生

本籍　福井縣遠敷郡宮川村新保第七號二八

略歴

一、大正十五年三月　本籍地尋常小學校卒業、ソノ後農業ニ從事ス

一、昭和九年一月　○○聯隊ニ入營ス

一、昭和十年十二月　歩兵上等兵ニテ除隊、其ノ後農兼土工ヲ爲ス

一、昭和十二年九月　應召

戰歴

昭和十二年九月十五日○○聯隊へ歩兵上等兵として應召し、○○部隊○○隊に編入同月二十三日野戰隊として征途につき、上海附近の戰闘に參加し、同年十月十四日右足脛部に小銃彈擦過銃傷を受け、野戰病院に於て治療全治した。

同十三年四月より○隊長として徐州附近の戰闘に參加し、同年八月より武漢攻略戰に○隊長として參加、その戰闘で右胸部に貫通銃創を受け、野戰病院、豫備病院、兵站病院を經て、同年十二月○○陸軍病院に還送、同十四年二月○○陸軍病院に轉送、同年六月臨時○○陸軍病院に轉送、同院に於て引續き加療中である。

陸軍歩兵上等兵　故

大野新兵衛君

大正四年二月一日生

本籍　島根縣安濃郡鳥井村大字鳥井三五九

略歴

一、昭和七年三月　島根縣立大田中學校卒業

一、同　年四月　農業ニ從事

一、昭和十二年十一月　應召

戰歴

昭和十二年十一月六日應召〇〇部隊に編入され、昭和十三年四月出征。所屬部隊は猛行軍を繼續し、昭和十三年〇月〇〇日午後七時三十分江蘇省威家庄東南方の無名部落を占領後、前方部落に相當多數の敵が伏在して居るのを探知し、該部隊は之れに夜襲を決行することゝなつた。敵前二百米に接近した時、敵よりの小銃彈及び手榴彈の猛射の中を、本人は勇敢にも該夜襲部隊の最前線に在つて、克く〇隊長を補佐し、屢々斥候勤務に服し前進中、敵彈によつて右肘に銃傷を負つた。然し尙、斃れて後已むの氣慨で勇躍進擊中、敵の小銃彈は更に右胸部を貫通し、遂に昭和十三年五月十八日午前一時三十分戰沒したのであつた。戰功により勳八等功七級に敍せられた。

尙、思想犯保護觀察法實施滿四周年を記念して、昭和十五年十一月二十日開催せられたる廣島保護觀察所管内囑託保護司大會は、同君の勳績を敬仰讃美して表彰す。その表彰狀は左の如くである。

表彰狀

故　大野新兵衛殿

右ハ今次事變ニ勇躍出征赫々タル武勳ヲ樹テ遂ニ名譽ノ戰死ヲ遂ゲ大東亞建設ノ礎石トナルソノ偉勳ハ至尊ニ達シ金鵄勳章並旭日章ヲ下賜セラル眞ニ一門ノ光榮之ニ如クハナク又一世ノ亀鑑タリ曾テノ思想的苦難ハ却テ錬成ノ因トナリ凝ツテハ即チ忠魂一徹散リテハ即チ大陸ノ華ト化ス

茲ニソノ勳績ヲ敬仰讃美シ粗品ヲ呈シテ表彰ノ記トス

昭和十五年十一月二十日

廣島保護觀察所管内　保　護　司　會

友人の見た大野君

「十七日意氣揚々〇〇に到着しました。（中略）汽車の窓から中天に輝く青い月をながめつゝ父母様の御健康を堅く〳〵御祈りした次第です。」

と、好漢大野の第一信は元氣に溢れてゐました。やがて數日後、「到着後は愈々〇〇攻撃に參加する豫定です。今後通信も思ふやうには出せないことゝ思ひますが、敢て心配をする事はございません。

現在自分達の上陸した處は迚も良い處です。新聞で見、本を見て識り、人に聞き想像してゐた支那は、想像以上のよい處です。特に大陸的な支那の自然の風景には惚れぼれします。（後略）」

と餘裕綽々として大陸の風景を愛でながら故郷への第二信を書いた彼は、また生來の兩親に對する細い心遣ひから、北支五省の色彩繪葉書を同時に送つてゐます。

この最後となつた第二信を見る時、私は死地に入つて往く時を待ちつゝある彼の淡々たる心境と、その底知れぬ膽力とに限りなき親しみと尊敬を覺える次第であります。

「前略　御息男大野君渡支致され、五月一日運河の線を離るゝこと五、六里の地點、牛歩店子部落に於て我が〇〇隊に配屬され、不肖私の〇隊に來られて生死を共にすべきを誓ひ、數度の激戰に參加せられ、常に勇敢にあられました。（中略）大野君が戰死致されたのは恰度五月十七日日暮より行軍開始、夜襲を行ひ敵前五十米に接近、最後の突擊に移つた際遂に逝かれました。（後略）」

とは彼の〇隊長福富晋壹君から遺族への通信です。快男兒大野新兵衞！彼は出征前腕を撫しながら自信たつぷりに、銃劍術は誰にも負けないと嘯いてゐたのに、敵前五十米「頑迷なる支那軍」を眼前にして、その自負する腕に物を言はさず空しく散つて往つたのです。

難戰僅かに十數日で武運拙く散つて往つた彼！若し肉彈戰迄生きてゐたら自慢の腕で癪に障る支那軍を彼の所謂「斷乎鏖殺」したでせうに、それさへなし得なかつた彼です。彼はその死に至る迄默々としてゐて、我々は華々しさを求むることは出來ません。假令地味な戰鬪に終始したとは言へ常に健鬪したであらうことは疑ひの餘地ありません。

陸軍歩兵上等兵　故　伊藤專一君

明治四十四年一月二十日生

本籍　島根縣知夫郡黑木村大字別府六一

略歷

一、昭和五年三月　島根師範學校卒業
一、同　年四月　島根縣安來小學校訓導奉職
一、昭和八年九月　島根縣西比田小學校訓導退職
一、昭和九年三月　農業ニ從事
一、昭和十二年八月　應召

戰　歷

昭和十二年八月十六日〇〇地に上陸後、泥濘膝を沒する惡路を灼熱炎天下に猛行軍し、同月二十四日河北省靜海縣濁流鎭附近の初陣以來相次ぐ數度の攻擊戰に、機關銃〇隊第五番射手として勇奮敢戰した。殊に南趙鎭戰鬪に於ては、敵陣地前端にあつて、猛威を逞しうする敵機關銃火のため友軍の進擊が困難であつたので、該機關銃〇隊は該敵に對し射擊を開始した所、本人は銃側の彈藥が僅少なるを察知して、附近に雨霰の如く飛來する敵彈の危險を何等介意することなく、豪膽不敵、迅速に彈藥の搬送をなしたのを始めとし、爾後、彈藥小隊よりの補充の連絡を適切ならしめ、友軍の射擊をして毫も澁滯なからしめ、以て機關銃の威力を遺憾なく發揮せしめ、其の行動による武功は拔群であつた。

次いで山東省德縣に向ふ追擊、並に同地附近の攻擊には、裝甲列車に乘車し、常に最前線に進出、克く友軍の追擊に協力且つ勇敢に奮戰したが、此の間、炎熱灼くが如き烈日下に激戰を交へ又至嚴なる警戒任務に夜を徹する等、晝夜兼行、忘我の奮戰をなし、加ふるに進擊の急速と泥濘のため、大行季追送意の如くならなかつた爲め、苦鬪困憊の末、遂に罹病し病死したものである。戰功により勳八等に敍せられ旭日桐葉章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵　故　平田耕一君

大正元年十二月二日生

本籍　山口縣山口市古熊五四

略　歷

一、昭和四年三月　山口縣立山口中學校卒業
一、昭和八年三月　山口高等學校卒業
一、同　年四月　東京帝國大學英文科入學
一、昭和九年　右大學中途退學
一、昭和十三年五月　應召

戰　歷

昭和十三年五月出征、同年六月〇〇部隊に編入せられ、擲彈筒手として江蘇省銅山縣三保附近の警備に當つた。次で徐州附近の警備並に討伐に從事したが、其の間常に剛毅沈着、卒先諸勤務に服し克く上官の命に從つて其の職責を全ふしたが、遂に病魔の犯すところとなつたので、昭和十三年八月〇〇野戰豫備病院に入院、更に〇〇野戰病院に移り同院にて戰病死した。戰功により勳八等に敍せられ、旭日章を賜る。

陸軍歩兵上等兵　**古田　稔君**

明治四十二年一月二十六日生

本籍　廣島縣廣島市中廣町九〇七

住所　廣島縣賀茂郡寺西村〇〇〇〇療養所

略　歷

一、大正五年四月　米國加洲フレスノ市立日本人小學校入學

一、大正九年十一月　廣島縣安佐郡三篠尋常小學校へ轉校シ、同十三年三月同校卒業

一、昭和四年三月　廣島縣立第一中學校卒業

一、同　四月　早稻田大學商科へ入學、同六年五月同校ヲ中途退學シ、農業ニ從事

一、昭和十年十二月　〇〇聯隊ニ入營シ、同十一年十二月上等兵ニ進級ノ上除隊

一、昭和十二年七月　應召

戰　歷

昭和十二年七月十二日光榮ある召集令狀を受くるや、皇恩に報い、君國に奉仕すべき絶好の機會とばかり勇躍したのであつた。

應召當時○○驛出發に際しては數百の見送人に對する挨拶として

「自分は曾て憂國の私情から○○を○し、取り返しのつかぬ大なる誤謬を犯しましたが、今日榮ある帝國軍人の一人として聖戰に參加致しますことは、誠に一身一家の譽であり、此上もない光榮とする所であります。今、一身を君國に捧げました以上、もとより生還は期してをりません。力の及ぶ限り、身命を賭して御奉公を申上げ、以て聊かなりとも既往の○○を拭ひ、以て皇恩の萬一に報い奉る覺悟であります」。

云々と悲壯なる決意を眉宇に浮べて、一死奉公の誠を神明に誓ひ、言々句々、肺腑に徹するの禮辭を述べたのであつた。

次いで七月十七日○○出發○○に集結、○○隊に編入後選ばれて○隊長となり、それ以後○○○○の警備についで寶店鎭の初陣に參加、進んで石家莊より敵を追つて山西省內山嶽戰に轉戰し

又、太原の殲滅戰に參加しては赫々たる幾多の武勳を樹て、更に南下して同省內最南端黃河對岸の○○に進出したが、不幸にして敵大部隊の重圍に陷ひり、文字通りの惡戰苦鬪僅に生芋を齧つて籠城を續け、孤兵克く同地を死守すること月餘に及んだが、偶々四月七日未明より襲ひ來つた敵大集團に應戰惡戰苦鬪の末、僅かに一ケ○隊の寡兵を以て之を擊退し、尙進んで○○に向つて猛攻前進中、不幸にして敵彈は折柄陣頭に立つた同君の胸部を貫通したのであつた。同君は一旦地に倒れたが、滿身之れ魂と化した氣丈夫さで、屈せず再び起ち上り、數步驅け出したが如何せん重傷に堪へ兼ね、其のまゝ人事不省に陷つた。

本人の負傷個所は、胸部穿透性貫通銃創兼上膊擦過銃創の重症で、一時は危險狀態であつたが其の後○○野戰病院で應急治療を受けた結果漸次快方に向ひ、只管再起奉公を念願してゐた處、その甲斐もなく、不幸にも肺結核症を併發、翌十四年六月、勇志空しく陸軍步兵上等兵（伍長勤務）にて兵役免除となり、○○○○療養所に入所、目下靜かに療養を續けてゐる。

病床の本人は現在の感想として

「戰傷に續いての肺結核の爲め、おそらく再起は不可能と存じますが、聊かなりとも君國の爲に御奉公が出來たのは、せめてもの滿足とする處であつて、況して日夜溫い治療を受け心中感謝の念に燃えてゐる次第です」と述懷してゐる。

陸軍歩兵伍長　故　後藤賢君

明治四十五年三月三十日生

本籍　鳥取縣西伯郡縣村大字河岡六八九

略歴

一、大正十三年三月　縣村尋常小學校卒業

一、昭和二年三月　箕蚊屋補習學校卒業、其ノ後農業ニ從事ス

一、昭和十二年七月　應召

戰歴

昭和十二年七月二十七日動員下令前、○○聯隊○○○隊に編入され、同年八月八日屯營出發後津浦沿線の戰闘其他數次の戰闘に參加したが、昭和十三年四月二十二日、大官庄の攻擊に於て壯烈な戰死を遂げた。

偶々昭和十三年四月二十一日山東省嶧縣東南大官庄攻擊に際し、○○隊長○○大尉の指揮に屬し、同日午後三時三十分大官庄の北方三粁附近に進出した。敵は部落周圍に堅固なる陣地を構築し、盛んに陣地の增强を施すと共に彈藥の補充、兵力の增援に奔走しつゝあるのを發見したので左第一線たる○隊は敵の右側背を衝く可く午後七時猛烈な攻擊を開始した。敵前六百米附近に進出した時、迫擊砲數門を有する約千の敵は左右より急激な集中射擊を浴せ、前進は意の如くならず、逐次各個に躍進し、暗夜に乘じ、敵前二百米附近に近迫、激烈な敵彈下にあつて沈着剛膽突擊準備を整へた。所がこの時、大官庄西方に當つて大火災を起し、地物なき該地一帶は正に照明下に在る如く隊形を暴露することゝなり、遂に夜襲の機を失し、一同腕を扼して拂曉攻擊の準備をすることゝなつたのであつた。

翌二十二日、早朝より小雨となり、泥土のため行動は自由を缺き、加ふるに敵彈は愈々熾烈となり殷々たる銃砲彈下、悲壯なる決意のもとに勇猛果敢敵前七十米の畑地に肉迫、將に突擊を決行しようとした刹那、敵の一彈伍長の左下腹部に命中し壯烈な戰死を遂げたのであつた。

伍長は性質溫健で諸事勤務に熱心、常に自ら進んで難に當るの風があつたが、此の勇敢剛膽な行動は○隊の志氣を鼓舞すると共に、數倍の敵を擊破した因をなすものとして其の功績は大なるものがある。

戰功により昭和十三年四月二十二日勳七等功六級に敍せられ、旭日章を拜受す。

陸軍歩兵上等兵　**衞藤速君**

本籍　大分縣宇佐郡南院内村大字上原　明治三十四年三月十五日生

住所　大分縣別府市龜川町

略歴

一、大正九年九月　日本大學夜間部法科專門部中途退學

一、同　十一月　神戸鐵道局雇員拜命

一、昭和五年九月　雇員免職

一、昭和七年四月　表具商經營

一、昭和十三年五月　應召

一、昭和十四年九月　○○局○○保線事務所ニ就職

昭和十三年五月二十四日臨時召集を受く。當時一年志願兵伍長であつたが〇〇關係によつて降等歩兵一等兵で出征。〇〇部隊(〇〇師團〇〇聯隊)に編入され、昭和十三年六月二十二日中支〇〇に上陸直ちに市内警備に就いた。

昭和十三年七月二日、警備交替、四日乘船、揚子江を溯江して七日〇〇上陸、泥濘を冒して猛烈な强行軍を敢行、八日夜に入つて馬頭鎭に到着した。

翌早曉、馬頭鎭を出發、行軍を續行して彭澤縣城に入城したが、不幸マラリヤに罹り、發熱して殆ど食も咽喉を通らない狀態になつた。

昭和十三年七月十七日朝、百二十三高地警備を命ぜられ、病を押して從軍進發、正午頃高地に到着して抵抗線に就く。四十度の高熱を冒して警備に當つた。翌十八日夜半、約九千の新兵器に裝備された敵精兵の夜襲を受け、〇〇隊(所屬〇隊)全員約百五六十名で必死の抵抗をし惡戰苦鬪死傷者續出し、遂に友軍と替り、〇〇隊は彭澤城に後退した。本人の衰弱は甚しく、診斷の結果暫らく入院靜養することゝなつた。

やがて退院、七月二十五日、〇〇隊を追うて九江と南昌の中間の地點に上陸、所屬隊に復歸して盧山々麓高瀧鎭警備についた。八月三日拂曉頑强なる盧山の敵堅壘を攻略しやうと進發し、翌四日第一線間近まで進出したが、全員彭澤に於いての雪辱に氣負立ち士氣軒昂。同夜左腕に白布を卷き、合言葉を定めて壯烈な夜襲を決行、漆黑の暗夜、地形を辨ずる者なく畦を這ひ、クリークを涉り敵陣地たる高地の麓にある小川にたどりつく。後方との連絡全く杜絶して、百餘名の兵闇にまぎれ、同夜をその小川に潛み明かす。生還完く期し難く、恐らくこゝ數時間の生命であらうと思へば萬感交々にして、愛する妻子を懷ひ、恩師と朋友を心に呼び袂別の言葉を胸底にたゝむだのである。

明くれば翌五日、夜襲隊が不安のうちに一夜を過した小川の數十歩上流に忽然として支那兵五、六名現れて消え、再び現れて小川の方を覗ふ。敵本隊と連絡したらしい。今は一刻の逡巡を許さず、勇敢な十數名の兵士は先頭に立つて俄然攻勢に移り、敵兵を追うて小川を上る。忽ち激烈なる戰鬪展開され、彼我の陣地轟々と火を吐く。夜襲隊は喊聲を擧げつゝ續々と前面の三一三・五高地めがけて遮二無二進擊を始めたが、高地は胸つく急坂で、その上到る處に逆茂木があり壕が掘られ、進出は遲々とし捗らず、敵の投下する手榴彈に殪れるものは夥しい數に上つた、漸く高

地の八合目まで登つた時、衞藤一等兵は高橋少尉、行時上等兵と共に全隊の最先頭にあつた。負傷直前の情況をその手記に見る。

「自分は比較的冷靜であつた。中腰で擊ちまくつた。前盒後盒全部行軍途中拾つた小銃彈を、これも拾つた支那兵の雜囊に入れ、丁度乞食坊主の樣にぶら〳〵と前に下げてゐたが、それも殆ど擊ち盡して了ひさうになつた。丁度その折彈倉の入口に斜めに銃丸がからんでどうしても動かない。

「衞藤古兵、彈盒底拔きとつて彈丸を打ち拔け――」

と高橋少尉が言ひ終らない間一髪、何度目かの「手榴彈！」と叫ぶ聲を聞いたと同時に、雷光のやうに出沒した十七、八歳の少年敵手榴彈手の姿を見た。その刹那三尺位左斜下に煙を噴いてゐる手榴彈を見たので本能的に滿身の力で屈んだ儘右に跳ねたのであつた。全身の血が一度に引いて胸惡るく嘔吐を催し、脫糞を頻りに催した。既にその破片は十糎の深部腸骨を折り腸骨を打碎いてその內方に盲貫したのであつた。

高橋少尉は當然「衞藤古兵確りせい」とか何とか言ふべき場面であつたが全く聲がなかつた。少尉は破片で頭部を貫通即死してゐた。行時上等兵又右の肩から胸深く破片が盲貫し、血に染んで殪れてゐた。

直ちに中尾上等兵に助けられて高地を下り、支那土民家屋に入り、一夜を敵襲の危險に曝されつゝ慘殺の不安に悒々として過した。然し〇〇隊の決死的戰鬪によつて三一三、五高地は完全に占領されてゐた。〇〇隊は歷史的な盧山攻略戰に有利な據點を供して〇〇長の激賞と感狀を授與された。

八月七日土民家屋の假收容所から第二收容所に運ばれ、野戰病院を轉々後送され、昭和十三年九月十九日〇〇陸軍病院に入り、〇〇、〇〇、〇〇、〇〇分院等の陸軍病院に於て治療、その間五回の手術をうけ、十四年九月二十六日〇〇陸軍病院を退院後、除隊となつたものであるが、その際特に上等兵に昇進の榮を擔つた。その後、〇〇保護觀察所の斡旋で、〇〇鐵道局に復職叶ひ、現在、〇鐵〇〇保線事務所に勤務し銃後の奉公に勵んでゐる。

陸軍航空兵上等兵

堀田勇君

明治四十二年三月二十九日生

本籍　福岡縣三潴郡大溝村大字横溝

住所　八幡市西前田港町

略歴

一、大正十二年三月　福岡市男子高等小學校卒業

一、大正十四年六月　九州水力電氣軌道株式會社車掌

一、昭和三年八月　鐘紡博多工場職工

一、昭和十年三月　八幡市山川運送店運轉手

一、昭和十二年七月　應召

戰歴

昭和十二年七月七日蘆溝橋の銃聲と共に果しもなく擴がらうとする氣運に滿ちた七月二日十應召し獨立飛行隊〇〇隊に編入、航空兵一等兵として同月三十日〇〇に着いてより支那事變に活動し八月十六日上海派遣を命ぜられ、同月十九日〇〇を出發し二十一日〇〇に到着、三十日には上海派遣軍〇〇部の隷下に入つた。

九月三日〇〇上陸直ちに附近の戰鬪に參加、翌年一月三日句容に轉戰し、二月十二日杭州に轉進の爲浙江省道藩山附近を二、三臺の自動車隊の運轉手として行進中、敵約三百の襲擊を受け、應戰强行通過中左足背部盲貫銃創、左蹠趾擦過銃創の傷痍を受け、〇〇野戰病院に入院した。

三月十三日〇〇野戰病院に轉院、三月二十八日〇〇港を出帆し、三十一日〇〇港上陸〇〇整備隊に編入されると共に〇〇陸軍病院に入院し、五月七日〇〇陸軍病院に轉送、十九日には〇〇陸軍轉地療養所に轉じ、六月一日〇〇陸軍病院に還り、八月三日治癒退院、五日には上等兵に昇進し、召集解除さる。

陸軍歩兵大尉　故

村岡　徹君

明治四十五年三月三十一日生

本籍　宮崎縣南那珂郡飫肥町大字吉野方一六三四

略歴

宮崎縣都城中學校卒業後、和歌山高等商業學校ニ入學、同校卒業後夕刊大阪新聞ノ記者トシテ活動中、昭和十二年七月應召ス

戰歴

昭和十二年七月三十日幹部候補生として應召、同年八月北支に出動以來千軍臺附近の激戰を始め、各地に轉戰、〇〇部隊の隷下に在つて軍司令官香月中將より感狀を授與された。

更に中支に轉戰し、同年十一月五日〇〇灣敵前上陸を敢行、平望鎭の最重要據點を占領、古今未例の再度の感狀を柳川軍司令官より授與され、其の功績實に拔群。更に十一月十七日南潯鎭の堅壘を拔き南京に切迫した。道程百餘里、十數日連續の追擊中驚異的難强行軍をなし、遂に十二月十二日待望の南京城西南角に突擊を敢行し城頭高く晴れの日章旗を揭げた。

當日〇〇〇隊（當時少尉〇〇〇隊の〇隊長）は南京城西南角城壁下五十米に接近、クリーク、鐵條網、銃彈等を冒して意氣軒昂の氣魄を以つて突進、遂に壞檣の間隙より城頭に攀り輝く日章旗を揭げたのであつた。彈丸は雨霰の如く、戰死者、負傷者は陸續として頻出、然も之に怯まず城壁上に突擊した時、先登の村岡少尉は右腕貫通銃創等を受け、鮮血淋漓形相悽愴。遂に〇〇野戰病院に入院、翌十三年一月六日〇〇兵站病院を退院、再び第一線に參加、愈々漢口攻擊の火蓋は切つて落された。〇〇中隊は追擊隊の最先鋒として戰車隊と同行し、息つく間なき不斷の攻擊

に周章てふためく敵數千の殲滅に凱歌を擧げ、砲數十門を鹵獲した。漢口の警備につく事數十日、部隊は〇〇地方の警備に任ぜられ靳春邊河石灰窟にあること約三ヶ月、再び南昌作戰に向ふ。折しも三月二十七日南昌西南方約二十里の風樹嶺附近に數百の敵兵現れ、頑强に反抗したので第一線〇隊の村岡中尉は先頭にあつて前進しやうとして遂に名譽の戰死を遂げた。

殊勳甲で功四級金鵄勳章勳六等旭日章を賜はり、大尉に昇進した。

陸軍歩兵中尉　故　**青木實君**

明治三十九年十月二十六日生

住所　青森縣三戸町大字梅田字同心町平

略歴

一、大正十一年二月　三戸尋常高等小學校卒業
一、大正十四年九月　專檢合格
一、大正十五年四月　早稲田第二高等學院ニ入學
一、昭和四年四月　早稲田大學政經部三學年ニ入學
一、昭和七年二月　右學部ヲ退學ス
一、昭和八年十二月　〇〇聯隊ニ幹部候補生トシテ入營シ、同九年十一月除隊ス
一、昭和十年　遞信省電氣試驗所ニ勤務
一、昭和十二年八月　應召

戰　歷

昭和十二年八月二十四日歩兵少尉として應召、〇〇部隊の一員として出征、北支戰線第一線で、活躍中、河北省正定附近の戰闘に於て敵兵十數名を撫斬にし愛刀を折つたが、その武勳は全軍の敬仰の的となつた。

昭和十三年四月三日、青木少尉の屬する〇〇部隊〇〇部隊は北支山西省屯留縣附近に於て、約三千の敵と遭遇、大激戰を演じたが、此の戰闘に於ても青木少尉は常に最前線に於て部下を指揮奮闘したのであつた。愈々突撃命令下り、少尉は拳銃を左に持ち、軍刀を抜いて敵の輕機の猛射の中を勇敢に突撃したが、この時、敵彈は少尉の胸部を貫通し、壯烈な戰死を遂げた。

戰死後、歩兵中尉に任ぜられ、支那事變第二十二回の論功行賞に、勳六等功五級を以て賞せられる。

昭和十六年二月十八日　印刷
昭和十六年二月廿二日　發行

（非賣品）

發行人　鈴木信海　東京市澁谷區千駄谷四ノ六六八
印刷人　福神和三　東京市京橋區銀座西一ノ七
印刷所　福神製本印刷所　東京市京橋區銀座西一ノ七

發行所　財團法人　司法保護協會
東京市麹町區三番町七番地ノ十二
電話九段(33)二四六二・三七〇三　三七〇四

不許複製

終